
ANOTHER SKY

沖田コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANOTHER SKY

【著者名】

沖田コウ

【あらすじ】

「道具は手段でしかない。銃がそこにあつたとして、トリガを引くのは、いつだって人です」

ドライな主人公と、ハードボイルドの香り漂うファンタジー！

登場人物紹介（前書き）

『ANOTHER SKY』の登場人物紹介です！
ストーリーが進むことに隨時、更新、変更を行うので
ある程度、話が進んでくると『ANOTHER SKY』を初めて
見る人にとっては、
ネタバレになる可能性があるので、『ご注意下さい。』

一度本文を読み終えてから、想像を膨らませるために読むことをお
勧めします。

（9月10日19時、ちょっとぴり追加）

登場人物紹介

サエバ・ミズキ

身長162cm 体重50kg 年齢18歳

その昔、魔女の証や魔物との混血の証と言われていた赤毛の持ち主。顔立ちは少女のようで、声も男と言うよりは女のような声である。そのせいで、初対面の人にはよく女だと言われる。

本人は慣れたと言っているが、実はかなり嫌がっている。町のボロアパートに住んでおり、バウンティハンターを生業とするが、本人は便利屋だと言って譲らない。

ある目的のためにバウンティハンターを続けている様だが・・・。戦闘時は、体つきに不釣り合いなほど巨大な拳銃を使用する。

因みに、名前を漢字で書くと

冴羽サエバ
瑞姫ミズキ

である。

リーンベル・ローズヴェルト

身長? 体重? 年齢16歳前後 (見た目)

金髪碧眼の少女。髪はとても長く、腰に届くほどの長さ。ミズキが仕事で探ししている人物。

常に分厚く大きな本を背負っている。本の内容は誰にも見せようとしない。暇さえあればその本を読んでいる。必ずこの国のどこかにいる。

それ以外の情報はない。

ミズキに渡された写真は、白黒のずいぶん古い物であるが、その容姿は全く変わっていないという。

アーネスト・エトワール

身長176cm 体重68kg 年齢21歳

病気につかつた母の治療費のため、ミズキを襲つて金を奪おうとした青年。

言葉遣いはあまりよくないが、本来は心優しい青年である。

病魔に侵された母の治療費を全額負担したミズキに、何か恩返しがしたいと思い、リーンベル・ローズヴェルトを探す旅に同行する。

ミズキに比べると、アーネストの方が主人公っぽい性格をしているかもしません。（笑）

登場人物紹介（後書き）

前書きの一番最後にいつ『登場人物紹介』が追加されたかを記しているので、次に開くときの参考にしてください。

ある人物の手記

一百年ほど前だらうか？

長い年月を経たと云つのに、日本はその当時から全く変わらないようだ。変わったのと言えば、国名だけ、なぜか日本國に改名した。恐らく、めまぐるしく変化（良い変化ではない。ほとんどが悪い方に変化している）していく世界情勢に、日本も変化した、ということをアピールするためではないだらうか。

他国は戦争を繰り返し、逆に小国に分裂せざるを得なかつたところの方が多い。なにせ、日本国が、最も大きな国TOP10にランクインするほどなのだ。一つの国の小ささが伺える。

学生の頃、世界史関連の資料（実は一般人は見てはならない極秘の物だつたりする。どうして、私がそんなことが可能だつたのかは聞かないでほしい）を読み漁つていた私に、衝撃を与えた。

今日の大東洋は、百を超える小国からなつてゐる。一百年前は、それが、一つの国家Aとして成り立つてゐたというのだ。それも、学問、技術など、どれをとっても、世界トップクラスだつたと云うではないか。今の東の大東洋には、当時の面影など一つもない。これは世界全体に言えることではあるが、戦争の末（まだ、戦争が続いている場所もあるため、この表現は不適切かもしれない）技術などは昔に比べ、明らかに衰えているように見える。

そもそも、何故戦争をしなければならなかつたのか。それまで、世界はある程度均衡を保つてゐた。それを壊してまで、何を得たかつたのだろうか。できるこじなら、当時の首脳たちに聞いてみたい。私の推測では・・・・・いや、やめておこう。確証もないのに、それが真実であるかのように語ることを、私はあまり好みない。

戦争で疲弊しきつた土地は、もう既に人が住めるような土地ではなくなつてゐる所もある。現在、魔物と部類される未知の生物まで、発生してしまつた。

原因が何であるのかは、私の専門分野ではないため、わからない。というより興味ない。

魔物と言つても、よくあるゲームの様に、突然、人を襲うといつことはほとんどない。彼らは姿かたちこそ、既存の生物とは違い、恐れられてはいるが、普通の生物と何ら変わりのない生物だ。簡単に言つなら、新種。中に凶暴な種や、人を主食とする魔物もいるが、我々人間に見られる自然破壊や他の動物への破壊活動、偏食（ベジタリアン等）を考えると、極めてナチュラルなことではないかと、私は考える。

さて、長い長い前置きはこれぐらいにして、ここからが本題である。

なぜ、私がこのようなものを書こうと思つたのか、実は私自身、ちゃんと理解できていない。

あまり細かい内容は書こうと思わない。それは、この文章が誰かの手に渡ることを前提とはしていいからだ。私はこれを誰にも読ませる気などない。

だから、ここに書かれた内容を私が見て、私だけが思い出せる程度の内容であれば良いと思つている。

思えば、私がまだ若く学生だった頃、二十年ほど前にな
る

に書こうとした日記とよく似ているかもしない。

その時の日記は、三日でやめてしまった。三日坊主というやつだ。

自分で決めたことであるし、できる限りこの手記を書いていきた
いと思う。毎日書く、という訳ではない。しかし、何か興味深い出
来事があれば、隨時、この手記に書き込んでいきたいと思う。

四月一日

まさかこんな日に、こんなことが起ることは。

日本国の奴らが工作員を送り込んできた。人数は一人、新しい研
究所員として送り込まれてきた。全く、政府の考えていることは
私には理解できない。

そうだ。ここでは彼女をKとしておこう。

これは、誰にも言えない話だ。誰が言えるものかKに一囃ぼれし
てしまつたなどと。

そして、この手記を書き始めた理由がKであることなど。
私と彼女は、いわば敵同士。相容れぬ存在なのだ。

四月六日

初めてKに話しかけた。緊張しそぎだ。

声が震えていた。三十を超えた男が、女一人にドギマギするなど、
格好悪いことこの上ない。

彼女の笑顔はよかつた。だが、私に光を感じさせてはくれなかっ
た。

四月十五日

最近、Kがやたらと私に話しかけてくる。一体どういふことだ。
体が触れ合うことも、増えてきた。そのたび彼女は「すみません」と言つて顔を赤らめる。

それが、私への好意の表れなのか、いわゆるハニー・トラップといつものなのか、私にはわからない。
できれば、前者であつてほしいものだ。

そんな可能性など、微塵もないのだろうけれど。

五月五日

彼女に花を渡した。

久しぶりに地上に出て、見つけた、小さな花だった。

私は久しぶりに見た花を、大事に持ちかえり、この小さな感動を彼女と共有しようと思つた。

彼女は手で口を覆い、花を見つめていた。

「これを私に？」

「え、ええ。そうです」

いまだに彼女との会話は慣れない。

胸が痛くなるのだ。

誰もこんな中年の色恋沙汰に興味ないだろう。といふか、気持ち悪いだろう。

だから、私は誰にも見せない。

五月三十日

もう駄目だ。

私は駄目だ。

おかしくなりそうだ。

もう、こんな状況には耐えられない。

私は決心した。明日、Kを呼び出そう。

五月三十一日

私はすべてをKに打ち明けた。

Kが政府の工作員だということを、知っている。そして、その上でKを好きになってしまったこと。

私は殺されると思った。私はKが工作員だと言つことを知つてゐる、ただ一人の人間なのだ。つまり、私が消えれば、いいだけの話。私は目を閉じてその時を待つた。

だが、私の予想は裏切られた。

Kは泣いた。泣いてどこかへ行つてしまつた。

六月一日

Kの姿が見えない。

政府に帰つたのだろうか？

六月二日

Kに呼び出された。

Kもすべてを打ち明けてくれた。

彼女の目的は私の抹殺だつたらしい。ただし、その前に私と親密になり、情報を引き出せるだけ引き出せ、と言われていたようだ。つまり、ハニー・トラップそのものだった。

私は彼女に拳銃を渡した。

私を殺せ、と言った。

それで、彼女のためになるのであれば、それでいいと思った。だが、彼女はできなかつた。

「私も、貴方が事が好きになつてしまつたんです」
涙を流す彼女を、私は何も言わずに抱きしめた。これこそがトラップであつたのならば、私は既にこの世にいなうだろ。だが、私には、なぜか彼女の涙が本物であると確信していた。そして私は「ともに行こう」と彼女に告げた。

大幅にページが破られており、続きがわからない。

四月一十七日

Kに、この手記に名前を出さないようにと言われた。

あいつめ、これを見たのか・・・。

それに、差支えのありそうな部分を破つて持つて行かれた。出会つて一年ほどたつので、かなりの枚数があつたと思うのだが・・・。

思い出とは儚い物である。

五月十一日

ある理論を思いついた。

それは、とても恐ろしいものだつた。

私は一体、何を考えているのだらう。自分で考えたことではあるが、おぞましいとも思う。
いや、それでも、いつかは試してみたい。

六月一日

私は、ある国の王から依頼を受けた。

ある人物を治療してほしい、とのことだつた。

王から私は説明を受けた。その話はとても信じられるものではなかつた。そして、その人物（話を聞いた後では『人物』と言つてよいかどうかわからないが）は現在、死の淵に立つていて。治療法自体は一応知つているようだつたが、それができる医師がいなかつた

らしい。

あまり難しい内容ではない。

だが、成功させるには、魔女の血が大量に必要だった。

六月二十日

ある国の王からの連絡があった。

魔女の村を発見

。

五日後に兵を送り込み、村を壊滅させると言つた。

私は血を集めるために、その部隊について行こうと思つ。

六月二十五日

部隊の隊長は、国王の息子である、第一王子だった。

正直言つて、あまり良い人物には思えなかつた。それは、私も同じか・・・。

血は十分に集まつた。これで、恐らく、依頼を成功させることができるだろう。

魔女の村は壊滅。それはもう、酷い物であつた。地面は真っ赤に染まりあがり、家は燃やされ、目の前にはたくさんの赤が広がつた。

私はKと生存者がいなか探して回つた。

罪悪感があつたのかもしれない。自分の仕事のために、村を一つ壊滅させたのだ。

しかし、私はそこで、見つけてしまつた。

これで、私の理論を確かめることができる。

『それら』を見つけた時、私の頭から罪悪感などは消えていた。

六月二十六日

ギリギリだつた。だが、間に合つた。

私は正しかつたのだ。

いや、まだ完全に、決まつたわけではない。経過が必要だ。

それまでの間は、依頼の作業に集中しよう。

六月二十八日

依頼は成功。

私は治療を成功させた。しかし、ビックを間違えたのか、とんでもない副作用が生じている。

それは、私ではどうしようもない。

彼の国に任せよう。

私の依頼は、『治療する』ことだつたのだ。

依然として、もう片方は目を覚まさない。一応、機械をつないでいるので、生命活動は維持できている。
まだ経過が必要か・・・。

七月一日

私に依頼を持ちかけてきた王が、依頼の品（私の治療した人物）を取りに来た。予想以上の出来だつたらしく、満足しているようだ

つた。

私はその人物の状態を説明。彼は、自分たちで何とかすると言つた。

まだ目覚めない。私の理論は間違っていたのか・・・・・。

九月一日

目覚めた。

私は正しかつた。

続きを書かれていらない。

ある人物の手記（後書き）

世界観を、もう少しわかりやすくするために追加しました。

訳の分からぬ文章が続いていますが、大丈夫だつたでしょうか？

もしかしたら、全ての意味がわかつた人がいるかもしませんが、「わかつた」とだけ言って、そのあとは胸の内に秘めておいていただければ、と思います。

因みに、もう一度ブログがある予定です・・・。

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

赤髪、揺れる

『ああ、なんてことをしてくれたんだ。
なぜ、俺はここでいるんだ。
一度死んだはずなのに。
どうして、こんなところでいる。
俺に、何をしろというんだ。
俺に、何ができると言つんだ。』

俺は伸ばした手で、空を搔き鳴らした。

』

街のはずれにある湖。そのすぐ隣には、小汚い喫茶店が立っていた。

最近、この周辺で、店に入る客を見ていたが、ハンターらしき人物はほとんど見られなかつた。

僕は空を見上げた。

風が吹く。

肩まで伸ばした髪が揺れた。

とりあえず、入つてみようか。

僕は喫茶店のドアを開け、中に入る。かぎなれた煙草の香りがする。間接照明が多く、店の中は少し暗い。

カウンターには、五十歳ほどに見える、口髭を蓄えた男がいる。恰好から彼がこの店のマスターだろう。

僕はマスターにゆっくりと歩み寄る。

「おい、あいつ・・・」

「ああ、赤髪だな」

「初めて見た」

「魔女だろ?」

「魔物との混血って話もあるぞ」

「それにしても、あの女。こんなところに何の用なんだ?」

他の客の会話が聞こえてくる。どれも、聞くに堪えない。もっとまともな会話はできないのだろうか。

途中、何人かに声を掛けられたが、僕はそのすべて無視して、力

ウンターの一番端の席に腰掛けた。

「すみません」

僕はマスターに声をかけた。

「はい。ご注文は?」

「コーヒーを一つ、それと

「おい、嬢ちゃんさつきから話しかけているのに ー?」

僕は体の向きを変え、真後ろから僕の肩に向かつて伸された手を掴んだ。手を掴まれた男は、突然の僕の行動に驚いているようだった。

僕は首を傾けながら、につこりと微笑む。我ながら、上出来な笑みを作っていたと思う。

男は僕の笑みに気を取られ、一瞬緊張が緩む。

その隙に、男の脛をブーツの爪先で蹴った。爪先に鉄板を仕込んだブーツは、軽い蹴りでさえ、重さがある。男は痛みのあまり、その場に声もなくうずくまる。

「お嬢ちゃん、と言いましたか？ 残念ですが、僕は男です。僕はマスターと話をしているんです。邪魔しないでもらえますか？」

店内から、息を飲む気配が伝わる。

僕は椅子から立ち、男の耳元で「邪魔をするなら殺す」と囁いた。男は僕を睨んだが、何事もなかつたかのように、自分のいた席に戻つた。賢明な判断だと僕は思う。これ以上争つても、彼は死に、僕は店から出入り禁止を喰らいかねない。どちらの得にもならないのだ。

男は椅子に座るときもつ一度僕を睨んだが、僕は微笑んで手を振つてやつた。店の張りつめた空気は、失笑に変わつた。

「ところで、マスター。僕はこういったものです」

僕は胸のポケットから、名刺一枚を取り出し、マスターに渡した。

「便利屋？」

「ええ、ここを僕の依頼の待ち合わせ場所として、使わせていただきたいのです」

僕はマスターに向かつて微笑んだ。

今日一番の笑顔だつたと思う。

赤髪、揺れる（後書き）

今回短めです。

実は『AS』の連載を始めて、かなりたつてから気が付いたことがあります、この話がなければ、ちょっと大変なことが起こりかねなかつたのです。

そのため、急遽、この話を作りました。

恐らく、かなり小さなことなので、誰も気が付かないはず・・・。

次話から、ちゃんと話が進みます！

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第一話 サエバ・ミズキ

街のはずれにある、湖の隣に建つていて小汚い喫茶店の奥の席に、赤髪の少年が座っていた。その少年は静かな喫茶店の中、奇妙な雰囲気を纏っていた。

真っ黒いコートのような衣服に包まれた細身の体に、一見して少女を思わせる顔立ち。そして何より、彼のトレードマークである赤髪。この国では、赤髪は、ほとんどお目にかかるない、とても珍しい髪の色だった。その赤髪を、彼は肩まで伸ばし、後ろで一つに束ねていた。

喫茶店のマスターや常連客は、彼が男であることを知っている。彼も常連客の一人で、ある目的のためにここによくやつてくるのだった。

ただ、彼が常連客であつても素性は全く知れていない。分かつていることと言えば、女ではないこと、便利屋を生業としていること。注文するのはコーヒーのみということ。

たつたそれだけだった。

彼は誰かを待つていてるようで、もう一時間ほど前から、その席に座っていた。コーヒーを既に三杯も飲んでいたが、彼はまたコーヒーを注文した。よほど大切な待ち合わせなのだろう。

喫茶店のドアが開き、首に赤いスカーフを巻き、金属製の鞄を持った屈強そうな男が入ってきた。

彼はコーヒーを飲もうとした手を止め、その男の動作を目で追つた。

男はマスターに近づき、コーヒーとフレンチトーストを一つ注文。そして、カウンターには座らずに彼の所へ歩いてきた。

「ここに座つてもよろしいですか？」

男は彼に聞いた。

「いいえ・・・」

彼はそう言つたが、男は無視して彼の正面の椅子に座つた。

彼は何も言わず、冷めかけたコーヒーを飲んだ。猫舌のせいで熱いコーヒーが飲めないのだ。

彼がコーヒーを飲み終わる頃に、男のコーヒーとフレンチトーストが運ばれてきた。

彼が席を立とうとすると、男が呼び止めた。

「どうかしましたか？」

少女のようなのは顔立ちだけではなく、声も少女のようであった。何とも可愛らしく、それでいてどこか艶っぽいような声だ。

初対面であれば、必ず女だと思うだろう。

男はじっと彼を見つめた。

「僕の顔に何かついていますか？」

「いいえ、申し訳ありません。珍しいものですから、つい・・・」「赤髪の事ですか・・・。そうですね、昔は魔女の証だの、魔物との混血の証だのと言つて、差別の対象にされてきました。それに、この街では僕以外、赤髪の人見たことがありませんね」

彼はすっと、目を細めて男を見た。

「すみません。その様なつもりで言つたのではないのです。ええ、本当に」

男は大げさに片手を上げた。

他意はない、と言いたいのだろう。

「ところで・・・」

男が口を開く。

「外の湖にカエルがいたのですが、何匹いたかわかりますか」

「13匹です」

彼はすぐに答えた。そして、席に座りなおした。

男はフレンチトーストを頬張りながら「そうですか」と満足そうに頷いた。

「煙草を吸つてもよろしいですか？」

彼は煙草を吸うマネをしながら男に聞く。

「どうぞ、私のことはお構いなく」

それを聞いた彼は、胸のポケットから煙草を取り出し、ライターで火を点けた。

どう見ても十歳代にしか見えない彼だが、この国には未成年者の飲酒や喫煙を禁じる法はない。

彼は煙草をうますぎに吸うと、ゆっくりと煙を吐き出した。

「あなたは、サエバさんですか？」

不意に男が口を開いた。

「ええ、そうです。サエバ・ミズキと申します」

サエバ・ミズキと名乗った彼は、男に手を差し出した。男はそれに応じ、二人は握手をした。

「意外です。あなたがサエバさんだとは・・・」

「あなたみたいに屈強な男を想像していましたか？」

「そうですね。まさか、こんなに若い娘だとは・・・。それに背が低いとは聞いていましたが、想像以上に」

「歳は18歳。残念ながら僕は男です。それと、身長のことは気にしているので・・・」

ミズキは自分の口の前で指をクロスさせてバツ印を作った。言わないでほしい、と言ひ意味だ。

「おっと、これは失礼しました」

「いえ、慣れているので」

「どなご?」

「すべて」

ミズキが若い、女に見られる、背が低いと言われる。これはよくあることなので、さすがに慣れてしまった

「それにして、よく覚えられましたね？」

男は笑いながら言う。その時、一瞬だが、彼の口の中が見え、ミズキは嫌悪感に駆られた。

「暗号ですか？」

表情に出さずに答える。

「ええ、私がこの店に入つてからの行動。そして貴方との会話。そのすべてを覚えられるとは思つていませんでした」

実は、この男こそ、ミズキが待つっていた人物だったのだ。
そして、男の言う通り、男の行動を初めとする、すべては依頼主と請負人があ互いを確認するための暗号だったのだ。

もちろんその中には、男が遅れて店に入つてくる時間、ミズキが煙草を吸うタイミングなども含まれている。

「一度、この暗号よりもっと大変な暗号がありましたからね。13個の質問の答えをすべて覚えさせられました」

ミズキは笑いながら言つた。

煙草が短くなつたことに気が付き、火を揉み消した。

「手紙が送られてきたときは驚きました。まさか、僕にこんな高額な依頼が舞い込んでくるとは思つてもいなかつたので」

「ええ、サエバさんは、この町のバウンティハンターの方で一番成功率が高いと聞きました」

「バウンティハンターだなんて、大層な者ではありませんよ。ただ、町の人から依頼を受けたり、モブに指定された魔物や犯罪者を狩つたりして生活しているだけです」

モブとは、人や町になどに危害を加える危険な魔物や犯罪者のことで、バウンティハンターが集まる場所　　酒場や喫茶店
の掲示板に依頼が書き込まれる。

そういった掲示板がある店は、国からの指定を受けている店であり、その店の従業員たちはすべて公務員が経営している。

ミズキはあまりそいつた場所が好きではなく、依頼は基本個人的に受けるが、借家のボロアパートに手紙を届けてもらうようにし

ている。そして、依頼を受けに行くことはあっても、そこで飲み食いすることはほとんどなかつた。

「謙遜なさらなくとも大丈夫です」

「いいえ、謙遜などではありません。見た目通り僕は力も体力もありません。ただ、舞い込んでくる依頼が簡単なだけです。つまり

」

「運がいい？」

「その通り」

ミズキは指を鳴らしながら言つた。

「一つ質問をよろしいですか？」

男は「一ヒーを飲み干すと、そう言つた。

「ええ、どうぞ」

「あなたにとつて金とはなんですか？」

唐突な質問に、ミズキは困った顔をする。

「神、ではありますね。それほどの価値はありません……。僕にとつてですか、・・・ああ、難しいなあ

しばらく考えた後、ミズキは言つた。

「金は力であり、正義です。少なくとも僕にとつて、そしてこの国で生きていくためには、それ以上でもそれ以下でもありません……。

」

「なるほど。サエバさん、あなたは分かつていらつしゃるようだ」
その言葉に、ミズキは自分の眉がピクリと動くのがわかつた。

「では、依頼の話に入りましょつか」

男は自分の持ってきた鞄の中を探り始めた。

「その前に、僕から質問です」

「え？」

男が鞄を探るのを止めて、ミズキを見た。正確にはミズキのいた

場所を・・・。

いつの間にか男の後ろに回っていたミズキは、大口径の拳銃を男の後頭部に付きつけていた。

男の震えが、銃を通してミズキに伝わる。

「本物の依頼主はどこですか？」

今まで明るく話していた声とは一転して、氷の様に冷たい声音だつた。その声から、いつでも引き金は引けるという意思まで伝わる。「今までの行動が演技だということは、既にわかつていました」

「いつたい、どこから・・・!？」

「あなたが力エルの質問をした時です。その後、僕は言いましたよね？13個の質問の答えをすべて覚えさせられたことがある、と」ミズキは冷たい声のまま続けた。

店の中で騒ぎが起ころっているといふのに、マスターや他の客は止めようともしない。

この店の中で、いや、バウンティハンターの集まる店での争い事は日常茶飯事のため、たとえケンカが起きようと死者が出ようと誰も動じはしないのだ。

「それ、今日ここで、この時間に会つ予定の依頼主だつたんですねよ

「もう一つ質問です」

ミズキは震える男の耳元でそつと囁いた。

「その震えも、演技ですか？」

ミズキが言い終わらないうちに、男は銃を払いのけ、ミズキにつかみかかるとした。

ミズキはバックステップでそれを躱し、男の顎を蹴り上げた。

カウンターを見事に喰らつた男は床に倒れる。

その額にもう一度、拳銃を突きつけた。

「これが最後です。本物の依頼主をどこにやつた？」

男は勝てないとわかったのか、今度は演技ではなく恐怖で震えだ

していた。

どこからか拍手が鳴り響く。

不審に思つたミズキは音の主を探した。

「実に見事な判断だつた。申し訳ないが、その銃を下ろしていやつてくれないか・・・」

そこには、灰色のスーツを着た初老の男性が立つていた。

「その頼みに、僕が応える理由がありません」

ミズキは銃を男に突きつけたまま、顔だけを老人に向けて言った。
「置かれた状況を正確に判断してほしい。お願ひではないんだ。これは、命令だ」

静かに言つた老人。その手には、いつの間にか銃が握られていた。
ミズキは銃を下ろす。

男はミズキを睨みながら立ち上がつたが、彼には何もせず、老人の隣に立つた。

まだ、老人の銃はミズキを向いたままだ。

「あなたは誰ですか？」

ミズキは老人に聞いた。

「君の、本物の依頼主だ」

老人は静かに言つた。

第一話 サエバ・ミズキ（後書き）

「こんにちは、コウです！」

『ANOTHER SKY』第一話、如何だったでしょうか？
こちらは、私が他に連載している『願い事』のように定期更新はできないと存じますが、気長に待つていただけたら嬉しいです。

いくつか物語の用語が出てきました。

現在、『ANOTHER SKY』の用語集を作ろうかどうか悩んでいます。

もし、本文の中の説明でわからないうところがあれば、遠慮せずに言ってください！

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています！

第一話 搖れる煙

三人は椅子に座りなおした。
ミズキの正面に、男と老人が座っている。

ミズキはコーヒー、老人はミルクティーを注文して、それらが運ばれてくるまで、三人は無言のままだった。
「外の湖にカエルがいたのですが、何匹いたかわかりますか」

老人が聞いた。

「13匹です」

ミズキは質問に答える。

「ウサギを何匹食べたことがありますか？」

「13匹です」

「今日、殺した虫の数は？」

「13匹です」

「この喫茶店の天井裏には、ヤモリが住んでいるようですね？」

「13匹です」

「昨日は何体の魔物を狩りましたか？」

「13匹です」

「服に猫の毛がついていますね。猫を飼つていらっしゃるのですか？」

「？」

「13匹です」

「もしかして犬も？」

「13匹です」

「それはすごい。大家族、と言つたところですか。合わせて何匹ですか？」

「13匹です」

「ここから、数キロ離れたところにある牧場で飼われている牛は？」

「13匹です」

「街に悪戯カラスがいるようなのですが、何羽いるかわかりますか？」

「13匹です」

「そのカラスを懲らしめるために鷹を放そうと考えています。何羽がよろしいでしょうか？」

「13匹です」

「昨日、夢に出てきた友人の数は？」

「13匹です」

老人は満足げに何度も頷き、ネクタイを緩めた。

「素晴らしい。さすがは彼の見込んだ男だ。では、依頼の説明をさせてもらつてもよろしいですか？」

「・・・13匹です」

老人は嬉しそうに手を叩いた。

「よく、ひっかけにも、かかりませんでしたね？」

「13の質問にすべて、『13匹です』と答える。そして最後の質問の前には、ネクタイを緩める。そう手紙に書いてありました」
ミズキは冷静に言つたが、正直に言つと、最後の質問の前に合図があることを覚えていなければ、危なかつたかもしれない。

そして、最後の質問の時に老人が言つた『彼』とは一体誰なのか。それが唯一引っかかっていた。

「試すような真似をして申し訳ありませんでした。私はジョセフ・A・アークライトと申します。この歳になると、世の中のいろいろな側面が見えてくるので、人が簡単には信じられなくなるのです」
老人は申し訳なさそうに言つた。

「ええ、お気になさらず。よくあることです。それと世の中を見る目に、年齢は関係ありません」
ミズキは微笑みながら応えた。

「一ヒーを飲み干したミズキは、新しい煙草に火を点けた。

「では、依頼の説明をさせていただきます。」

さつきまで、ずっと黙っていた男が口を開く。

男は胸のポケットから一枚の写真を取り出し、ミズキにそれを渡した。

かなり古い写真のようだ、白黒写真で、ミズキより少し年下のように見える少女が写っていた。

少女の髪はとても長く、腰に届くほどの中だ。そして、その瞳には見た目の年齢からは、考えられないような憂いを帯びていた。写真をじっと見るミズキ。徐々に写真の少女に引き込まれていくような気がした。

「見とれてしましましたか？」

ジョセフに声をかけられ、ミズキは我に返った。

「依頼は人探しということでしたよね？」

「ええ、そうです。その写真に写っている少女を探してほしいのです」

その写真に写っている、といつ言葉に引っかかる。

「失礼ですが、ずいぶんと古い写真に見えます。この少女の容姿も変わっているのです？」

「いいえ、彼女はその写真のままの姿です。全く写真に違はないはありません」

「なぜ、そう言い切れるのですか？」

「それは最近、あえて白黒写真でとった物なのです」

「なるほど。ですが、写真の裏には、昔の日付が書かれていますよ」

「・・・・・つ！？」

「すみません。嘘です、鎌をかけました。どうこうとか、話してもらえますか？」

「それは、あなたが知る必要のないことです・・・

有無を言わさぬ口調だった。

ミズキは煙草の煙と一緒に溜息を吐いた。

訳あり・・・。

その言葉が頭に浮かび、今まで最高に高まっていた依頼への意欲を低下させる。

できれば、面倒な仕事は受けたくない。

しかし、それを言つては便利屋稼業を止めなくてはならないので口にしたことはない。

「前金で一万ユーロ、成功したら五万ユーロでどうが？」

報酬の金額を聞いたミズキは、驚きのあまり、煙を勢いよく吸い込みすぎたせいで激しく咳込んだ。

前金で一万。そして成功したら五万。

とてつもない大金だ。それに手紙に書いてあつた金額の倍になつていた。

この国の物価は高く、一般人の平均月収でようやく一ヶ月ギリギリの生活ができる。そのため食糧は自給自足を余儀なくされている家庭も多く、故に略奪や強盗が頻繁に発生するほど治安が悪い。だが一万ユーロともなると、そんな国でもある程度贅沢な暮らしを二年は続けられるだろう

それが、この仕事を成功させるだけで、六万ユーロも手に入る。十一年間も何もせずに生活できるのだ。

因みに、近隣の国でも通貨性を取り扱つてはいるが、ほとんどの国が金貨や銀貨などの貴金属を使つていて。

確かに、聞いた話によると、他の国では金貨一枚あれば、普通の生活をすれ一年は暮らせるらしい、その金貨一枚がこの国では、一千ユーロ程度にしかならない。

「足りませんか？」

「・・・・・」

ミズキは迷っていた。この仕事を受けるべきか、受けないべきか。答えを出すのを渋らせる理由は、やはり、訳ありといふことである。しかも、依頼主であるこの老人は、何かを隠している。

ただの人探しではないことは、既にわかっている。人探し程度にそんな大金をかける必要などないのだ。それが、例えどれだけ大切な人であつたとしても。

ミズキが言つたように、この国で金は力であり正義だ。金さえあれば何でもできる。食い物を買うことができれば、日用品を買うこともできる。経験を買うこともできれば、自分の起こした事件を揉み消すことだってできてしまう。

それなのに、ジョセフは六万ユーニットといつ大金を僕に払つと言つた。

危険な仕事であることは目に見えていた。

しかし、ミズキには果たさなければならない目的がある。そのためには金が必要なのだ。

「考える時間を下さい・・・」

「いいでしょ。できるだけ早くお願ひします」

「なら、この煙草を吸い終わるまで・・・」

ミズキは既に半分の長さになつた煙草をジョセフに見せた。

「決めました。その仕事、受けましょ」

「ありがとうございます」

「ですが、一つ条件が・・・」

「なんでしょうか？」

「前金と後金、その両方ともの金額を一倍にしてください。そういう仕事に見合った報酬になります。訳あり、なのでしょう？」

ミズキは悪戯っぽく微笑んだ。

ジョセフはミズキを睨んだまま黙り込む。

隣に座っていた男が立ち上がろうとしたが、ジョセフがそれを制した。

「いいでしょ、前金で一萬、後金で十万払います。ただし三か月以内に彼女を見つけて、私の所へ連れてきてください。それができなければ、後金はもちろん払いません」

「わかりました。では契約成立ですね。前金は

「今、払いましょう」

ジョセフが言うと、隣の男が鞄の中から札束を一つ取り出し、ミズキを睨みながら渡す。

ミズキは札の枚数を数えた。

「確かに、一万ユーロいただきました」

持つてきた魔物の革でできた鞄に札束を放り込む。

「あと、何かこの少女を探すうえで必要な情報、まあ特徴ですね・・・を提供していただけませんか？」

「金髪碧眼。常に分厚く大きな本を背負っています。本の内容は誰にも見せようとはしません。暇さえあればその本を読んでいます。そして必ずこの国のどこかにいます」

「そう断言できる理由は？」

「お答えできません」

「名前は？」

「リーンベル・ローズヴェルト・・・」

「探す為に手段は？」

「問いません」

「わかりました。では、明日にでも仕事を始めましょ」

「いえ、この後まっすぐ家に帰つて、準備をしたら、すぐに仕事

にかかりてください。時間は有限ですから・・・

「・・・ええ、わかりました。そうします」

ミズキは席を立ち、店を出ようとしました。

その時、ふと見たジョセフの顔が笑みを浮かべていた。

第一話 携れる煙（後書き）

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第二話 忘れてはならないモノ

間借りしているボロアパートに帰ったミズキは、ジョセフ老人に言われた通り仕事の準備を始めていた。

現金、寝袋、着替えを数着、飲料水、お世辞にも美味しいとは言えない携帯食料を次々と鞄の中へ詰め込む。

そして、これは使わずに済んだ方がありがたいが、愛用の巨大な拳銃と予備のマガジン。それを腰に巻いたホルスターに納めた。

前金を受け取ったはいいが、正直、こんな大金はこの仕事に使う必要がない。持ち歩いている所を見られ、強盗に襲われても困る。そう思いミズキはベッドの上に金の入った袋を放り投げた。

ミズキは胸のポケットから、ジョセフ老人に渡された一枚の写真を取り出した。

リーンベル・ローズヴェルト。

それが、写真に写っている少女の名前だ。
見た目は16歳前後。

しかし、「写真はモノクロ。モノクロ写真からカラー写真に移り変わったのが、約20年前。となると、この少女は普通であれば、36歳以上ということになる。20年以上もの間、容姿が変わらない、ということはまず考えられない。

この少女が普通ではないと考えるのが、普通だった。

ミズキは溜息をついた。

この少女（少女と言つてよいのかわからないが・・・）を二ヶ月以内に探し出し、ジョセフ老人の下へ連れて行く。

簡単に見えて、意外と骨の折れる仕事になりそうだ。

第一、彼女が大人しくミズキに付いてくるかどうかもわからない。必ず国内にいるということが、せめてもの救いと言つべきか。

ただ、この国は近隣諸国と比べ、非常に大きい。

最初は小さな国だった。それが、戦争の末、他の小国を次々に吸収し、今ではこの周辺では類稀な大国となつたのだ。

しかし、短い期間で領土を数倍に広げてしまつたせいが、物価も全く安定しておらず、治安は非常に悪い。

その国内を三ヶ月で回らなければならない。
どう考へても、期限ぎりぎりになるだろう。

ミズキはリーンベル・ローズヴェルトの写真を胸ポケットにしま
い。テーブルの上に置いてある写真を手に取つた。
それは三年前に撮つた写真だ。

ミズキと黒髪の少年の二人が笑顔で写つていた。写真のミズキは今よりもっと髪が長く、背中の辺りまで伸ばしていた。どこからどう見ても、少女と少年の微笑ましいツーショット写真にしか見えない。

だが、写真を持つミズキの手は徐々に力が入り、震えていた。
「この仕事が終われば、とんでもない大金が手に入る。それまで待つつていね。僕は必ず帰つてくる。そして、今度こそあいつを見つけ出すんだ・・・」

ミズキは小さな声で、写真に語りかけていた。

自分の部屋を出たミズキは、アパートの正面に停めてあるバイクに跨り、エンジンをかけた。

通りかかった人が珍しそうにバイクとミズキの両方を見る。

この国で車は貴族や王族の交通手段であり、庶民は乗ることができない。車を買うことはできるのだが、その日に食べるパンに困っている庶民には、車を買つなどということは夢のまた夢だった。バイクも例外ではなく、非常に高価な物だ。給料のいい仕事（バウンティハンター等がそれに当たる）に就いていたとしても、かなりの金を払わないと買えない物だった。

そんなバイクに赤毛の美少女（本来は少年である）が乗っているのだ。

ミズキはそのどちらともが、珍しく見える庶民の好奇の目に晒されることになった。

「これだからバイクに乗るのは嫌なんだ・・・」

ミズキは小さく舌打ちして、バイクを発進させよつとした。

その瞬間、爆音とともに背中から強い衝撃を受け、ミズキはバイク共々吹き飛ばされてしまった。

バイクの下敷きになってしまったミズキは、何とか顔を、衝撃を受けた方に向ける。

そして、その光景を見て自分の目を疑った。

ミズキの住んでいたボロアパートが炎上しているのだ。

通行人に自分の体の上に乗つたバイクを退かしてもらい、立ち上がる。

なんとか軽傷で済んだミズキは、ジョセフの言葉を思い出してい

た。

「」の後まっすぐ家に帰つて、準備をしたら、すぐに仕事にかかるください。

そして、ミズキが喫茶店を出るときに見せた、あの笑み。

なるほど、そういうことだつたのか・・・。

火事を聞きつけ、時間とともに集まつてくる野次馬たちの喧騒の中、ミズキは一人で納得していた。

前金だけで、あれほどの大金をもらえたのだ。別にリーンベル・ローズヴェルトを探さなくとも、生活していくことはできるし、ジョセフ老人には見つからなかつたと言えば働かなくて済む。しかし、それではジョセフ老人が困る。

それなら、嫌でも仕事をさせるために家をなくしてしまえばいい。ジョセフ老人は仕事をするための理由を与えたのだ。

もちろん、ジョセフ老人の言つ通り、すぐ仕事に取り掛からなければ、依頼を受けた人間は死んでしまう。

恐らく、それも計算の内。

思つていたより、ジョセフ老人はかなりのやり手のようである。

感情をコントロールする術は身に着けている。アパートを爆破されたことは、ミズキにとって何の問題でもなかつたし、一亿万ユーニットが、今こうしてアパートを燃やす火を見ている間にも、どんどん

灰に変わっていることさえ、些細なことでしかなかつた。

そうであるはずだつた。

ミズキは雷に打たれたような感覚に襲われた。何か大切なものを忘れている。

それは何だ?

金?

鞄?

カレンダー?

日記?

地図?

どれも違つ・・・!

写真、そう写真だ。

ミズキは野次馬を搔き分けながら、燃え盛るアパートに向かつて走り出した。途中、野次馬たちが叫び、喚き、ミズキを止めようとする。

邪魔をするものには容赦なく、蹴りを喰らわせながら走つた。

焼け焦げたドアを蹴破る。部屋の中は煙が充満していて、中に入るのは自殺行為にしか思えなかつたが、ミズキは躊躇わざ部屋の中に入った。

机の上に置かれた写真を見つける。幸い、端が少し焼けている程度で済んだ。

ミズキは写真を大事そつに胸ポケットにしまい。部屋の窓から飛び降りた。

着地の衝撃を、受け身を取り相殺させる。

野次馬たちから歓声が上がり、ミズキの周りに人が集まる。声をかけられたりもしたがすべて無視した。

「お姉ちゃん・・・」

「・・・?」

小さな女の子がミズキの袖を引っ張っていた。その手にはハンカチが握られている。

ミズキが女の子の目線に合わせるように、その場にしゃがむと、女の子は持っていたハンカチでミズキの顔を拭いた。ミズキを拭いたところが黒く汚れたていた。どうやら、煤が顔についていたらしい。

「ごめんね。僕はお姉ちゃんじゃなくて、お兄ちゃんなんだ。でも、ありがとう」

田をきょとんとさせた女の子の頭を撫出た後、ミズキは倒れたままのバイクに近づいた。

バイクを起こし、エンジンを掛け試みる。しかし、何度もエンジンが掛かる気配はなかった。

爆風で吹き飛ばされたときに、どこか壊れてしまつたらしい。仕方なく、ミズキはバイクをその場に捨て置き、リーンベル・ローズヴェルトを探す旅に出ることにした。

「待つていて、と言つたのに。一緒に旅をすることになつてしまつたね」

ミズキは少し嬉しそうに、胸ポケットにしまつてある写真に語りかけていた。

第三話 忘れではならないモノ（後書き）

「んにちは、コウです！

実はファンタジーの設定や世界観を本文中で表現するのがとても苦手です。

本文中で何とか説明しようとはしていますが、説明が分かりにくかつたり、前の文章からの流れがおかしいと思った方は、遠慮なく言っていただけだと嬉しいです！

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしております！

第四話 偽りは時に刃

公園のベンチに腰掛け、リーンベル・ローズヴェルトの写真を片手にハンバーガーを頬張るミズキ。

いつ見ても、吸い込まれそうな瞳をしている。モノクロ写真だというのに、実際の色が想像できてしまうほど、彼女の瞳は印象的だつた。

見た目の年齢からは想像できないほどの憂いを帯びた瞳は、見ている者に時間を忘れさせるほどの魅力があった。

リーンベル・ローズヴェルトを探し始めて早、一か月。何の手がかりも得られない毎日が続いていた。残り時間はあと一か月。

それまでの間に、なんとかしてこの人物を連れて帰らなければ、十万ユーニットという大金を手に入れることはできない。

ミズキは溜息をついた。

警備隊に捜索願を出そうにも、この国の警備隊は全く機能していない。犯罪が起こると、金を渡せば見逃し、道案内を頼むのにすら金を要求する。全く、どこまでも性質の悪い話だ。

仕方なくミズキは自分の足で探している。ようやく、この国三分の一を探し終えたところだった。

写真を胸ポケットにしまい正面を見ると、十歳前後であろう少年と少女が指を銜えて、ミズキのハンバーガーを見ていた。

普通の子供より小さな体。着ている服も継ぎ接ぎだらけだった。

一目見ただけで、近くにあるスラムの子供たちだとわかる。

まだハンバーガーは三分の一ほどしか食べていなかつたが、ミズキはそれを二人に差し出した。

「いいの？」

少年が聞く。

「お食べ。但し、」

「但し?」

「ちゃんと一人で分けること。それと一つお願ひを聞いてくれたら。君たちにもう一つずつ買ってきてあげよう」

少年と少女は、一生懸命に首を縦に振った。

「よし、じゃあここで待っていなさい」

ミズキは一人に一つずつハンバーガーを買ってきて渡す。
お腹が空いていたのであるう、二人はもの涙を浮かべながら、ハンバーガーを平らげた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

少女が涙を流しながら言った。ミズキは鞄にしまっていたハンカチを取り出し、少女の涙を拭いてやった。

「どういたしまして。でも僕は男なんだ」

ミズキは微笑んだ。少年が首を傾げる。

「そんな可愛い顔をしているのに?」

「ありがとう。でも、可愛い顔をしているのと、性別は全く関係ないよ」

頬に手を当て、少年と同じように首を傾げながら微笑んだ。男にしては、あまりにも可愛らしかった。ミズキの仕草に少年の顔が赤く染まる。

「それで、僕のお願いを聞いてくれるかな?」

「はい・・・」

少年はぼーっとしたまま答える。それを見た少女が少年の足を踏みつけた。

「ちょっとお嬢さん。困りますよ、そんなことしたら」

二人に頼みごとを伝え、どこかに行つた後、すぐに青年が走つて近づいてきた。お嬢さんと言われ、誰の事が気が付かなかつたが、青年の視線はベンチに座つたままのミズキに向けられていた。

「お嬢さん？」

ミズキは自分を指さしながら言つた。

「そう、お嬢さんのことだよ」

「残念ながら、僕は男です」

今日何度もかになる説明をする。

「男！？」

青年は大袈裟に驚いて見せる。

その反応にうんざりしながら、ミズキは煙草に火を点けた。

「何が困るのですか？僕は急いでいるので、手短に話してください」明らかにイライラしていた。

さつきの少年にサービスしすぎたのかもしれない。

深呼吸して、感情を鎮める。

「さつき、ガキどもに餌を『えたでしょ』？」

「ガキども」、「餌」と言ひ言葉に、ミズキの眉だけが反応した。

「ええ、それが何か？」

表情一つ変えずに答えた。

「困るのですよ。飯の味を覚えて、またここにやつてくる」

「別に僕は困りません」

煙を吐きながら言つた。青年は煙たそうに顔の前を手で扇いだ。

「ええ、そうでしょう。ですが、私たち商売人は困るのです。スマムのガキが近くにいるだけで、客が来やしない・・・」

「そうですか、気を付けます」

ミズキの表情は全く変わつていない。

ただ、ミズキが青年を相手にするとき、全く表情を変えないというのは珍しかつた。

ミズキは自分の顔がどれほど少女のようで可愛らしいかを知つて

いる。男性と話すときは少なからず武器としてその可憐らしさを用するものが通常だ。

それをしないといふことは、それより大切な考え方をしているか、その相手にいら立つているかのどちらかしかない。

もちろん、今回の場合は後者である。

それは、この青年の放っている空氣にも原因があった。

「ところで、さつきのガキとなにを話していたんです？」

「ああ、そのことですか。僕はある人を探していました、その人の写真を渡しているような人に聞き込みをするように頼みました。そして三日後にまたここに来るようだと。警備隊は役に立ちません。大人はがめつい。となると子供しかいないのでしょう?彼らに頼んで、見返りとして何かを与える。ギブ＆テイクというやつです」

「なるほど、頭の良い方だ。子供は純粹です。しかし、この街の、特にスラムの子供は違います。幼いころから人を騙し、傷つけ、盗み、殺しています。三日後にここに戻ってくることはないでしょう」「いいえ。それは可能性としてはありますが、ほんの僅かです」ミズキは青年を馬鹿にするように言った。

青年が顔をしかめる。

「なぜ、そう言い切れるのです？」

「彼らからは、純粹な『匂い』しかしませんでした。例えるなら、そう。雪の様に真っ白。嘘をつくようなことはしないでしよう。あなたみたいにね・・・」

ミズキが言い終わると同時に、青年の顔色が瞬時に変わりポケットからナイフを取り出した。

「もしかして、雪を見たことがありますか?」

「黙れ。金だ、金を出せ!」

青年は唾を飛ばしながら喚いた。

「雪を見たことがないから、怒ったのですか?」

ナイフを突きつけられてもミズキは至って冷静だ。顔色一つ変わつていない。

「五月蠅い！言つ通りにしろ！」

ナイフを持つ青年の手は小刻みに震えていた。その手を見てミズキは目を細めた。

残りわずかな煙草を一息に吸つて、煙を吐く。

「なぜ僕が金を持っていると？」

「あんなガキどもに飯を買ってやれるんだ。生活に余裕がなければできない」

「なるほど、確かに言われてみればそうですね」

「いいから、早く金を出せ。さもないと……」

「あなたにはできませんよ。そういう『匂い』がします」

青年が叫び声を上げミズキに突進する。ミズキはベンチから立ち上がりながら、指で煙草を男に向かって弾いた。

煙草が青年の額に命中し、僅かに怯んだ青年のスピードが落ちる。時間にすればコンマ数秒、ミズキへの到達が遅れる程度だつただろう。

だが、ミズキにはそのコンマ数秒で十分だった。

青年のナイフを構えた手を横に蹴りナイフを弾き落とす。

一瞬、蹴られた痛みに怯む青年だが、すぐにミズキに殴り掛かった。

顔面すれすれのところで青年の拳を躊躇し、腹を膝で蹴り上げた。痛みに腹を折る青年の後ろに回り込み、ミズキは彼の腕を捻り上げる。

青年は痛みに顔をしかめる。

青年の動きを封じたミズキは、腰のホルスターから拳銃を抜き、彼に見せた。

「こんなに大きな銃で撃たれたらどうなると思います？一発で頭の半分は吹き飛ばしますよ？」

彼の目には恐怖が宿り、死への恐れと、生への執着が見え始めていた。

「わ、悪かった。もう、何もしない。だから、命だけは……！」

「僕から金を奪おうとした次は、命乞いですか。都合がよすぎると
思いませんか?」

「頼む。命だけは・・・」

彼の目からは涙が溢れる。

「なにか理由があるなら聞きましょう」

ミズキは銃を突きつけたまま、静かに言った。

「母親が病気なんだ。医者に診てももう金が必要で・・・
「ずいぶんありきたりですね・・・」

「嘘じやない!」

「誰が嘘と言いましたか?僕はありきたりと言つただけです
「・・・?」

彼の顔がミズキの方へ向けられる。

「信じて、くれるのか?」

「あなたの母親に会わせてください。そうすれば、本当かどうか分
かります」

ミズキは銃をホルスターに納め、彼が立ち上がるのに手を貸した。

「僕はサエバ・ミズキと申します。名前は?
ミズキが聞いた。

「名前?」

「そう、お互ひ呼び合う時に知らないと不便でしょう
彼は納得したように頷いた。

「アーネスト・Hトワールだ」

「そうですか。よろしく、アーネスト・・・」

第四話 偽りは時に刃（後書き）

今回はポツとでのアーネストと、
これまた、ポツでのミズキの不思議な力が出てきました。

ミズキの不思議な力については、また後々。

それにしても、リーンベルはまだ登場しないのだろうか・・・。

感想、評価、ダメだし等々、お待ちしています！

第五話 便利屋稼業

結果から先に言つと、青年アーネスト・エトワールの言葉に嘘はなかつた。

彼の母は、病の床に臥していた。

ミズキがそつと近づくと目だけをうつすらと開けた。

「すみません。起こしてしまいました」

頭を下げる。

「どなたかしら？」

弱々しい声で彼女は言つた。

「アーネスト君の友人です」

隣のアーネストが険しい表情をする。それを横目で見たミズキは、彼女に見えないようアーネストの腿を抓つた。

「何を！？」

「話を僕に合わせてください」

小声で言つた。

「まあ、アーネストにこんなに可愛らしいお友達が……。アーネスト、なぜ今まで紹介してくれなかつたの？」

「母さん。こいつこんな顔はしているけど男だよ」

彼女は「まあ……」と目を見開く。

ミズキは笑顔で返した。

「初めてまして、サエバ・ミズキと申します」

「アーネストの母です。すみません、ベッドの上からで……。今、

飲み物を」

彼女はベッドから起き上がるつとするが、苦痛で顔をしかめる。

そして、大きく咳き込む。アーネストが駆け寄つた。

「大丈夫です。どうぞ、お構いなく」

「すみません・・・。アーネスト、何か飲み物をお出ししなさい」
アーネストは無言で、隣の部屋に向かつた。

ミズキは煙草が吸いたくなってきた。普段なら、そこにいる人に断りを入れてから吸うのだが、今は病人の前。さすがに我慢することにした。

それに、吸いたいときに吸えなくても、何の問題もなかつた。

「あの子が、迷惑を掛けたりはしていませんか?」

「ええ、何も。それどころか、彼にはいつもお世話になっています」
ミズキは微笑んだ。

もちろん、会ったのが今日初めてで、突然襲つてきたことは伏せておく。

「私が言つのも何ですが、あの子は口が悪いからよく誤解されがちですが、根はとてもいい子なんです。私も」

話している途中で彼女は、また大きくせき込んだ。その様子をミズキはじつと見ていて、咳が止んでから、ミズキは口を開いた。

「失礼ですが。病気の方は・・・」

「数週間前にかかったのだと思います。熱と、咳が少しあるだけです。放つておけば治ると思います」

苦しそうにしながらも、彼女は笑顔で答えた。

「少し?それにしては、ずいぶん苦しそうに見えます。それに、彼も気付いていますよ」

ミズキの言葉に、彼女の顔が伏せられる。しまった、と思つた時には、既に遅かった。

ある程度の自覚は彼女にもあるようだ。恐らく、息子に迷惑をかけまいとしているのだろう。

「すみません。余計な口を利いてしまいました。アーネスト君を手伝つてきます」

そう言つて、ミズキは隣の部屋へ移動した。

「ずいぶん酷いようですね・・・」

後ろから声を掛けられたアーネストが振り返る。ミズキが壁にもたれていた。煙草を指先で弄んでいる。

「ここでは吸うなよ」

「別に、吸おうと思つて持つているわけではありません」

ミズキはポケットに煙草を戻した。実はほんの少しだけ、裁縫針で紙を刺した時にできる穴ほど僅かな気持ちだったが、煙草を吸いたいと思つていた。

「それで、酷いつて？」

「病気の進行が酷いということです。放つておけば、一ヶ月も経たずに死んでしまうでしょう」

アーネストの顔に絶望の色が浮かぶ。ミズキはそれを視界に入れないように、わざと顔を背けた。

他人のネガティブな顔を見ても気持ちの良い物ではない。思つたことをすぐに言つてしまつてこの癖のせいで、後悔したことは何度もある。そろそろ直すように努力しようか、と考えミズキだつた。

「とりあえず、あなたの言つていたことが嘘ではないことがわかりました。公園での一件は見逃します」

壁から離れながら、ミズキは言った。

「よくもこの状況でそんなことを！」

アーネストはミズキに掴み掛つた。ミズキは何の抵抗もなく、アーネストに捕らえられる。そして、そのままの勢いで壁に叩きつけられた。

普段のミズキには、あまり見られない行動だ。体も小さく、力もないミズキにとって、戦闘時に体の大きな相手に捕らえられるということは、即ち死を意味する。そうならないため、相手の行動を逸

速く読み、常に先手を取る。それが、ミズキの戦闘スタイルのはずだった。

アーネストが憤怒の形相でミズキを睨んでいた。対するミズキは焦りも何も感じさせない、全くの無表情だった。

「アーネスト。君は自分がやっていることの意味を理解していますか？」

「五月蠅い。今からでも遅くはないんだ。お前を殺して、金を奪つ「僕を殺して、お母さんにはなんと説明するつもりですか？」

「そんなこと、後からでも考えられる」

襟を掴んでいたアーネストの手が素早くミズキの首に当たられた。今回も避けようと思えば避けられる速さだったが、ミズキは何の抵抗もない。

アーネストの行動をただ冷静に見つめていた。

首を絞める力が強くなり、息ができなくなる。徐々に苦しくなり始めた。目の前は暗くなつて、意識が朦朧とする。

人生で二度目に味わう死の淵だった。

一度目は、それが『死』である、といつ認識さえできなかつた。痛いという感覚すら消え失せ、考えることを放棄した。

ただただ目の前で起こつてゐる惨劇を見つめ、受け入れることしかできなかつた。

そう、あの頃は力がなかつたのだ。

力さえあれば、あの状況を覆せたかもしれない。

過去に対する不確定な希望的観測。

では、今は力がある？

今もない？

必要ない？

仕方ない？

そんなはずはない。

だとしても、この状況を回避したところで、いったい何になる？

どうせ、一度死んでいる。

一度目に死んだって、どうつてことはないのではないか？

ようやく死ねるのだ。

ようやく彼女の下へ行けるのだ。

馬鹿げた、愚かな、つまらない目的のために生きなくてすむ。

喜ばしいことではないのか。

彼女は怒るだろうか？

いや、きっと笑って許してくれるだろう。

彼女はそういう子だった。

完全に意識がなくなる直前、アーネストが首を絞めていた手を放した。

ミズキはその場に倒れこみ、盛大に咳き込みながら、体が求めるままに酸素を吸った。

「やはり、君には無理だった」

ミズキは独り言のように呟いた。

「でも、僕は殺してほしかったかもしねない」

寂しそうに続けたミズキは、呼吸を整えてから立ち上がった。

アーネストはその場に手で顔を覆い、泣き崩れてしまった。

ミズキは無言のまま、服の乱れを正す。その間もずっと目だけはアーネストを見ていた。

「母親を助けたいですか？」

ミズキは優しく問い合わせた。

アーネストは泣きながら頷く。

「ならば、僕に依頼しなさい。知っている医者の中で、一番腕のいい医者を紹介しようと」

アーネストの顔が上げられた。

その目がミズキに問いかける。「できるのか」と…。

「僕は便利屋です」

ミズキは静かに微笑んだ。

第五話 便利屋稼業（後書き）

- 『ANOTHER SKY』は煙草の描写が非常に多いですね・・・。
- 誤解を招かないために言いますが、私は吸っていませんよ？
- 因みに、煙草の描写は、尊敬している作家さんの描写を参考にさせていただいています。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第六話 意志と意思と医師

「アーネスト。この家に電話はありますか？」

「ああ、向こうの部屋にある」

アーネストは涙を拭いながら、奥の部屋を指さした。

「借りますよ」

ミズキは足早に部屋を移動し、電話を見つけるとすぐに番号を入力した。国際電話であることを確認するアナウンスが流れ、呼び出し音が鳴る。

どこに電話をしているのか気になつたアーネストが、ミズキの顔を覗き込む。ミズキは口の前の人差し指を立てて、ワインクした。

「・・・カナコさん？ お久しぶりです。はい、サエバです。・・・ええ、ドクタ・ウエムラに繋いで頂けますか？」

ミズキはどこか異国の言葉を話している。そのため、アーネストにはどのような会話をしているのかわからない。からうじて、「力ナコ」と「ウエムラ」という人物の名前が聞き取れる程度だつた。

受話器を耳に当てたままミズキはアーネストの方へ向いた。

「僕の手術を担当した医者です。あまり雰囲気はよろしくないのですが、僕が最も信頼 ウエムラ？ サエバです」

突然、アーネストとの会話を切り上げたミズキは、異国語を話し始めた。

「そちらではもう夜でしたか・・・。いいえ、僕ではありません。是非、ドクタに診てもらいたい患者がいます。・・・え？ できない？ ドクタ、それは約束が違います。本人の同意なしにあんな手術をしておいて、今度は契約まで破るつもりですか？」

時々、受話器から相手の声が漏れておりその声から、ミズキが電話している相手が男だとわかる。かすれた声で、ずいぶんと低音である。

「・・・ええ、別に僕はかまいませんよ。ですが、断ると言うのな

ら、それなりの手段は取らせて、さすがはドクタ。呑み込みが早い。では、一日以内に僕の所へ来てください。……場所ですか？ どうせ、あの『手術』の時に発信器ぐらい埋め込んでいるのではないですか？ 「ええ、それぐらいわかりますよ。ドクタにとつて僕は、大事な被験者なんですから……。それでは、一日以内に来てくださいね。くれぐれも時間に遅れないように。遅れたら……わかっていますね？」

ミズキは、まだ電話の向こう側で叫んでいる声を無視して、受話器を置いた。どうやら電話が終わったらしい。

終始笑顔で話していたミズキだが、ところどころ齧迫めいたことを言っていたのは雰囲気でわかった。そして、途中、一瞬だけ見せた寂しそうな顔がアーネストの脳裏に焼き付いていた。

「ミズキ。ウエムラというのは？」

「僕の手術を担当した医者です」

「その手術とは？」

「それは、あなたの依頼を達成する上で、何の関係もありません」

ミズキは険しい顔つきで言った。つまり、聞くな、ということだらう。

「心配しなくとも、ウエムラの腕は確かです。彼に任せましょう」

アーネストの家の前に、一組の男女が立っていた。

男は、まだ40代だというのに、髪がすべて白髪だ。縁の広い眼鏡をかけて、薄汚れた白衣を着ていた。

女は、黒髪のショートヘア。そして、男と同じように白衣を着ている。化粧も薄く、肌の感じからそれほど歳をとっていないということが予想される。恐らく20代後半だろう。

「ここか・・・？」

眠そうに眼を擦りながら、男が聞いた。

彼との電話が終わり、今が18時間23分54秒。時間には余裕で間に合つた。ただ、ここに来るまでの間、一睡もしていないせいで、眠気が脅威と思えるほどに眠かつた。

「ええ、この家の中でしょう」

「それにしても、力ナコ君。どうしてばれてしまったのだろうね？」

発信器？」

力ナコと呼ばれた女は、溜息をついた。そして、男を睨む。

「彼を、実験動物を見るような目で見ていたのは誰ですか？　失礼ですが。彼が『手術』の後、目覚めてから生命活動が自身で維持できるとわかるまでの間、あなたは間違いなくそんな目で彼を見ていました。彼はそれに気づいていたのですよ」

「わかった。わかったから、そんな怖い顔をしないでくれ」

彼は両手を上げてひらひらとさせた。彼と力ナコの間でよく使われる、彼の降参の意を表すポーズだ。

「しっかりしてください。ドクタ・ウエムラ」

「私は至つて冷静。常にいつも通りだよ」

ウエムラと呼ばれた男は笑いながら答えた。

「最後の言葉、意味が重複しています」

力ナコはもう一度、溜息をついた。

「それでは、お邪魔させてもらおうか・・・・」

玄関の扉が開く音がした。席を立ち玄関へと向かつたアーネストの後をミズキは付いて行つた。

玄関で、男と女が立つていた。

「カナコさん、それにウエムラ。よく来てくれました。まさか、これほど早く来られるとは思つていませんでしたよ」

ミズキが一人に駆け寄つた。

「いら、用があるのは私だらう。なぜ、ついでのよつた言い方をする」

顔をしかめるウエムラを無視して、ミズキはアーネストに一人を紹介する。

「こちらが、ウエムラ・キヨタカ。僕の手術を担当した医者です。そして隣の方が、カナコさん。ウエムラの助手です。・・・ええつと、二人はもう籍は・・・」

「ええ。おかげさまで」

ウエムラとカナコは夫婦だ。しかし、仕事の時はお互いの私情を挟まないために、ウエムラは「カナコ君」と、カナコは「ウエムラ」。または「ドクタ」とお互いのことを呼ぶ。

「サエバ。その後、体の調子はどうだ?」

ウエムラが問う。

「ええ、今のところ何ともありません」

「そうか、そうか」

ウエムラは満足そうに何度も頷く。それを見たカナコがウエムラの頬を抓つた。

「それが駄目だと言つたのです」

「? どうかしましたか?」

「いいえ。こちらの話」

カナコはウエムラの頬を放すと、ミズキに向かつて微笑む。ミズキは小さな顔を横に傾けた。

「かなり病気が進行している様だな」

アーネストの母に事情を説明して、ウエムラの診察を受けてもらった。

アーネストの友人であるミズキが便利屋で、ウエムラを紹介した、ということだけを彼女に伝えた。

現在は診察を終え、彼女を除いた四人で話し合っている。

「それで、助かるのか？」

恐る恐る、アーネストが口を開く。ウエムラは突然笑い出した。

「助かるのか？ 青年よ。それは誰に対して言っているのだ？」

突然一人で笑い出したウエムラにアーネストは驚き、ミズキと力ナコは呆れかえっていた。

「いや、失礼。あまりにも答えが簡単すぎる質問だったのつい・・・」

ウエムラは目の端にじみ出る涙を拭つた。

「君の母は助かるよ。但し、少し言葉が違うな。・・・正確には、私が助ける、だな」

アーネストの顔には安堵の色が浮かぶ。ウエムラは得意げに頷いている。

「ところで、煙草は――」

ウエムラがポケットから煙草とライタを取り出しながら言った。

「ここは禁煙だ」

即答したアーネストに、肩を落とすウエムラ。その二人を見て笑う、ミズキと力ナコであった。

ミズキとウエムラは一度外に出て、煙草を吸っていた。

「ところで、ドクタ」

ミズキが口を開いた。

「この国の医療設備を使うつもりですか？」

「いや、残念ながらこの国ではできない。私はこの国に友人はいな

いかぬ。どこの設備も借りられないだらつ。となると

「日本国へ連れて帰る？」

「そうだ。あちらの方がどう考えても設備も整つてゐる」

「アーネストには説明したのですか？」

「ああ、この後、すぐにするよ。急ではあるが、今日の晩には出発したい」

日本国 ウエムラ、カナコ、そしてミズキの出身国である。周りを海で囲まれた島国で、この国と比べると物価もある程度安定している。この国で言つところの警備隊である警察の働きもそれなりに評価できる。それもあって、治安も割といい方だ。

何より、医療設備が整つており、医療技術においても恐らく世界トップクラスだということは日本国が他国に誇れることでもあつた。

「ところで、サエバ。一度、お前も戻つてくる気はないのか？」

「いえ、僕にはやるべきことが残つていますので。それにまだ、ドクタに体を輪切りにされるのはごめんです」

ミズキは煙草の火を揉み消しながら言つた。

「まだ、続けているのか？」

「ええ、あいつを見つけて殺すまでは・・・」

「そのための『サエバ・ミズキ』か？」

ミズキの表情が変わった。

「それは、あなたには関係ないことだ！」

ミズキは大声を出した。話を切り上げるためだ。しかし、ウエムラは表情一つ変えずに続ける。

「虚しいとは思わんかね？」

「思いません。僕はそのために生きている」

「それが虚しいと、私は言ったのだが」

一人はお互いを睨み合つ。

「まあ、君がいいと言つのなら、それでいいよ」

ウエムラはまだ少し残つてゐる煙草をその場に捨て、靴底で火を消した。

「悲しいね。そんなことをやせるために、あの手術をしたわけではないのだが」

「誰がそうしてくれと、頼みましたか！」

ミズキはウエムラの胸倉をつかむ。ミズキの方が、大分身長が低いので見上げるような形になる。

「あなたのせいだ、僕は・・・！」

ミズキの頬を涙が伝う。ウエムラはその涙の行先を見つめていた。頬を伝った涙は、顎にたどり着き、そして地面に落ちた。小さな染みを地面に作った。

「悪かった。落ち着け、サエバ」

その言葉でミズキは、はつとする。

自分の頬に触れた。

指が水で濡れた。

涙が流れている。
涙を流している。

何故？

感情をコントロールすることは簡単なはずなのに、なぜか止まらない。一度大きく息を吸って、肺に留める。その間に思考を切り替え、感情をコントロールする。

簡単なはずなのに、できない。

自分らしくない、と思いながらも、流れる涙を止めることはできなかつた。

一人、涙を流し続けるミズキをその場に置いて、ウエムラは家の

中に入つて行つた。

第六話 意志と意思と医師（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第七話 夢と赤 違う空

目の前が赤い。
何もかもが赤い。
何の赤?
血の赤。

どうしてこんなことになってしまった?

何かが聞こえる。

女の悲鳴。

彼女の悲鳴。

助けなくては。

でも、体が動かない。

既に、腕も、足も、体と離れていた。

動けないのだった。

彼女が目の前に来た。
連れてこられた。

あの男に、彼女は服を?がれ。

男に凌辱される。

男は言う。

見ているか?

楽しいか?

それとも。

もう死んでいるのか?

男は笑っていた。

既に何も考えてていなかつた。

目の前の惨劇を受け入れていた。

痛いという感覚すら、既に消え失せていた。

彼女の目は「こちら」に向けられている。

泣いている。

助けを求めている。

ゴメンね。

体が動かないんだ。

だから、仕方ない。

君を助けることはできない。

本当にゴメンね。

男は最後に、彼女の眉間に穴を開けて帰つて行った。

赤が彼女の眉間に流れれる。

彼女の目は恐怖で見開かれたままだった。

それを見ていた。

すべてを見ていた。

すべてを受け入れた。

何もできなかつた。

ミズキが目を覚ますと、アーネストが顔を覗き込んでいた。
ゆっくりと起き上がったミズキがアーネストの顔を抓る。
「なぜ、僕の寝顔を覗き込んでいるのですか？」

「お前がずいぶんとうなされていたから、心配して見にきたんだ」「うなされていた？ 僕が？」

額に触れると、汗が手に付いた。さっきまで寝ていたベッドを見ると、大量の寝汗を搔いていたことがわかる。

明らかに、あの夢のせいだった。

「それにしても、あんたは本当に男なのか？ なんというか、寝顔とかすゞく女のようだった」

「余計なことを言わないでください。何度も言つてこるよう、僕は男です」

アーネストに渡されたタオルで顔を拭く。少しこで濡らしていたようで、ひんやりとして気持ちよかつた。

今日は、あの少年たちと出合つて三回。出合つた公園で聞き込み調査の結果を聞く約束の日だった。

「アーネスト。今、何時ですか？」

「12時40分」

アーネストが時計を見ながら答える。

「12時40分！？」

ミズキは声を上げた。

少年たちと待ち合わせをした時間は13時。あと20分しかない。今すぐ準備をしてここを出なければ間に合わなかつた。

ミズキはすぐに新しい服を鞄から取り出し、上着を脱いだ。だが、背後に違和感があつた。アーネストが見ていたのだ。

「男の着替えなんか見ていて、楽しいですか？」

「そんな訳あるか！」

アーネストが足早にその場を去る。それを見届けてからミズキは、いつもの黒いコートに着替えた。

鏡を見て、身だしなみを確認する。あとはいつも通り、髪をゴムで束ねるだけ。

髪をゴムで束ねようとしたが、ゴムが見つからない。

「僕の髪留めのゴムを知りませんか？」

アーネストに聞いたが返事は「知らない」の一言だつた。

既に時間に余裕はなかつた。仕方なく髪を束ねるのは諦め、鞄の中にでも紛れ込んだのだろう、と決めつけたミズキは、アーネストの家を後にしようとする。

「ミズキ。調査結果は？」

「帰つてきました」

それだけを言つて、ミズキは待ち合わせ場所の公園に急ぐ。肩まで伸ばした赤毛が、風で靡いていた。

アーネストの母は昨日の晩、ウエムラ達と一緒に日本国へ向かつた。治療費はウエムラを齎し、半額にさせた上でミズキの全額負担という話に落ち着き、その見返りにミズキがアーネストに求めたことが、この街周辺の調査だつた。

調査内容は、リーンベル・ローズヴェルトの写真（少年達に渡したものもそうだが、今回の調査のためにアーネストに渡した写真は「ピーである）を街の人見せ、どこかで見たことがないかを聞く。そして、もう一つは、おかしな事件や噂を見聞きしなかつたかを街の人見聞いて回らせた。

事件や噂のことを聞いて回らせたのは、リーンベル・ローズヴェルトの特異性と依頼主であるジョセフ老人の態度を考慮したことだつた。

二十年近く容姿が変わらない。そして、人探しに、主に戦闘を仕事とするバウンティ・ハンター（ミズキ自身は便利屋と言つて譲らない）を雇つた。この二点から、何か事件が絡んでいてもおかしくはないと踏んだからであつた。

「あ、お兄ちゃん」

少年と少女が公園のベンチに座っていた。少女がミズキに手を振った。ミズキもそれに応じ、手を振りかえした。

「「」めんね。時間に遅れて」

「つうん、僕たちもさつき、着いた所」

「それじゃあ。どんな話が聞けたか、僕に教えてくれる?」

正直な話、ミズキはあまり期待していなかった。子供たちの働きに期待していなかつたのではない。この街に何らかの情報があることを期待していなかつた。

だが、ミズキの期待はいい方向に裏切られることになる。

少年たちの聞き込みによると、どうやら、一週間ほど前の話だが、この街で写真とよく似た少女を見たという人が複数いた。その少女は、大きな革製の鞄を背負つており、髪は腰に届くほどの中長髪だったという。彼女は何の目的もなく旅をしているようで、北の街にはどう行けばいいのかを聞いていたらしい。それ以降は誰も彼女を見かけなくなつたといつ。

有力な情報に、ミズキの口角が意識してもいないのに少しだけ上がる。

「ありがとう。助かつたよ」

ミズキは一人の頭を順番に撫でた。

「お礼に、これを・・・」

ミズキは一人に紙袋を差し出した。

「これは?」

少女が不思議そうな顔で、ミズキと紙袋を交互に見る。

「食糧だよ。ほとんどが保存食だから、日持ちする。ちゃんと、一日に食べる量を考えるんだよ」

そう言い残してミズキは公園を後にした。

「アーネスト、僕です。帰りました」

返事がない。

「アーネスト?」

ミズキは家中を探して回った。

アーネストの母が寝ていた部屋にも、ミズキが泊まつた部屋にも
アーネストの姿はない。さすがに、一度も案内されていない部屋に
入るのは気が引ける。

仕方なくミズキは、アーネストが現れるまで、泊まっていた部屋
にいることにした。

今日には、もう次の街へ出発する予定だ。思わぬ収穫があつたせ
いもある。善は急げ、という言葉が確かあつたはずだ。

いくら待つてもアーネストは現れない。ミズキは溜息をつきなが
ら、ポケットから煙草を取り出し、オイルライタで火を点けた。
ベッドに座り、煙草をふかしながら、窓から覗く青空を見つめる。

雲一つない青空。

あの時とは大違い。

あの時の空は土砂降だった。

赤い空だった。

今は違う。

違う空を見ている。

それに違うのは、
空だけではない。

思考を巡らせていると、側頭部に軽い衝撃を受けた。力を全く入
れていなかつたミズキはそのままベッドに倒れ込む。

「ここは禁煙だ」

アーネストだった。ミズキはベッドに倒れたまま、アーネストを

睨む。

「アーネスト。どこへ行っていたのですか？」

「それより早く、煙草の火を消せ」

ミズキはもう一度だけ煙草を吸い、ベッドから起き上がりたあと、わざとアーネストに向かつて煙を吐く。アーネストは咳き込んだ。そして、まだ長かつた煙草を窓から外に捨てた。

「いつたい、その荷物は何ですか？」

アーネストの足元には、大きな荷物袋が置いてあった。ミズキはそれを見て目を細める。

「あんた、人を探して旅をしているんだろう？」

「ええ、旅というより、仕事ですが」

アーネストが何を言おうとしているのかは、既に予想がついていた。そして、それに対する反応もミズキは決めていた。

「俺も連れて行ってくれ

「断ります」

即答だった。

きつぱりと、できるだけ拒絶の意志が伝わるよう戻したつもりだった。

しかし、アーネストはまだ諦めていない。

「あんたは母の命の恩人だ。それに、治療費まで全額払ってくれた。何か手伝いがしたい」

「その件なら、もう既に調査をしてもらいました。それに今後、あなたに手伝つてもうよくなことは何もない」

「でも、それでは俺の気が收まらない」

「危険な仕事です」

「そんなことは、百も承知だ」

ミズキは溜息をついた。どうやら、梃子でも動かせそうにない。

「わかりました。好きにしてください。但し、条件があります」

ここに戻つてくる途中に買った、髪留めのゴムで髪を束ねる。アーネストが不思議そうにミズキを見る。

「絶対に僕の見ている所で死なないでくださいね。後味が悪いです

から

ミズキは小さな顔を傾けながら微笑んだ。

第七話 夢と赤 違つ空（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第八話 ナイフと銃

「なんだそれは・・・？」
ミズキが差し出したある物に、アーネストは困惑した表情を浮かべる。

銃だ。かなり小型の物で、両手の平に収まる程度の大きさだった。アーネストが仕事に同行することを許可したミズキは、彼の調査の結果を聞くことを後回しにして、この銃を買つてきた。

「見てわかりませんか？」

「わかるさ。銃だろ」

「そうです。あなたに差し上げます」

そう言つてミズキは、アーネストに銃を差し出した。アーネストの表情は困惑したままだ。銃を受け取ろうとしない。

「どうしたのですか？」

ミズキが問う。

「銃は人を殺す道具だ」

アーネストは銃から目を背けながら言つた。

「道具が人を殺す、と？」

「そうだ・・・」

「三日前は、僕にナイフを向けたり、首を絞めたりしたあなたが、何を怖がる必要があるのですか？」

「あれは・・・」

アーネストの顔が伏せられる。ミズキは冷めた目で彼を見ていた。
「あれは、人を殺した感覚を自分に残すためだ。その感覚で、罪の意識を自分に持たせるために・・・」

「罪の意識を自分に持たせる？ アーネスト。君はこれから先、そんなことを考えながら、僕に付いて来るつもりだったのですか？」
「ああ。そのつもりだ」

「それならば、僕に付いて来ないでください。邪魔なだけです」

今回もミズキはきっぱりと言い放った。今からでも遅くはない。
そんな考まで付いて来られると、こちらが迷惑なだけだった。

アーネストの顔が驚いたように上げられる。

「背負い切れると思いますか？」無理です。君がいくら強靭な精神を持つていたとしても

「それでも俺は・・・」

「僕が君に出した条件を忘れたわけではありませんよね？」ついさつきの事です」

「絶対にミズキの見ている前では死ない・・・」

「そう、それです。ですが、今の君の考えだと必ず君は死にます」
はっきりと言い切るミズキの言葉にアーネストの顔がまた伏せられた。

「僕たちは、いつ、どこで突然襲われるかわかりません。それは魔物かもしれないし、人かもしれない。自分の命を守るために、時には相手の命を奪うこともあるでしょう。罪の意識など、持たないに限ります」

ミズキは吐き捨てるように言った。

「相手を殺さないで倒すことだつて」

「こりぞというようにアーネストは反論するが、ミズキに遮られる。「相手を殺さずに倒すことは、ただ単純に殺すことより難しい」

聞き分けのない子供を諭す親のような目だった。

因みに、とミズキは空を見上げて言った。

「僕はこの仕事を始めてから、たくさんの命を奪ってきました。ですが、罪の意識など、一度も持つたことがありません」

ミズキは声の調子を変えずに、淡々と続ける。

「僕には果たさなければならない目的があるからです。わかりますか？ 優先順位というやつです。因みに、君の優先順位の一番は、僕の前で死なないこと」

「お前の言つ目的ってなんだ？ お前はなぜ、そんな風に割り切れるんだ？」

「目的を話す必要がありますか？」

アーネストの問いに厳しい表情で返す。

「その目的とやらを聞けば、俺も少しは何が正しいかわかるかもしない」

ミズキは溜息をついた。そして、沈黙。

迷つてゐるようだつた。

長い沈黙が一人を包む。

「わかりました。君には話しておきましょう」

その前に、とミズキはアーネストの目を見た。

「いいですか、アーネスト。これが人を殺すのではありません」

ミズキは銃口をアーネストに向けた。そして、「バン！」と銃を撃つ真似をした。

「人が人殺すのです。道具は手段でしかない。銃がそこにあつたとして、トリガを引くのは、いつだつて人です」

銃をアーネストに押し付け、ミズキは自分の銃を取り出す。

「持つていなさい。それがあれば、襲われても相手を脅して逃げることもできる。要は使い方です」

自分でも甘いことを言つてゐることがわかつた。ミズキが空に向けて一発、弾丸を放つ。銃声が響き、肩に衝撃が伝わつた。

薬莢が銃から排出される。ミズキにはそれがスローモーションに見えた。長い長い時間をかけて、回転しながら地面に落ちる。地面で跳ね返つた薬莢は、アーネストの足元に転がつた。

「僕の目的は、ある男に復讐を果たすことです。つまり、僕はそいつを殺す」

ミズキはあえて声の調子を変えずに言つた。アーネストが息を飲

むのが伝わる。

「因みに、便利屋を営んでいる理由は金を貯めるため。その男を殺した後、僕の犯罪歴を金で揉み消すつもりです」

「何のために？」

「さあ？ ドクタ・ウエムラの貴重な実験体にされるためですかね」ミズキはくすりと笑った。もちろん、本当はそんな理由ではない。冗談で言つたつもりだった。

「すまない。俺には何が正しいのか、わからない」

「別にかまいません。理解してもらおうなど、初めから思つていませんから」

ミズキは空を仰ぎ見た。そして、アーネストに辛うじて聞こえる程度の声で呟いた。

「何が正しいか、正しくないかななど、人によつて違います。人々、すべての人と共に通して正しいことなんて、存在しないのですよ・・・」

「

第八話 ナイフと銃（後書き）

今回は少し短めでした。

『ANOTHER SKY』第八話、『ナイフと銃』如何だったでしょうか？

実は元々、この『ANOTHER SKY』は、哲学的な内容を絡めた物語にしたいと考えていました。

ようやく、今回の話でそれが書けたかな、と思します。

今後もハードボイルドの香りを漂わせつつ、哲学っぽいセリフなどを増やせたら、と思います。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第九話 捉えた目標

「ミズキ。調査結果だ」

そう言つて、アーネストは紙を数枚、ミズキに渡した。受け取った調査結果にざつと目を通す。

最初の紙には、リーンベル・ローズヴェルトの目撃証言。だいたいは、あの少年達の言つていたことと同じ内容だつた。

違つっていたのは、目撃され始めた時期とされなくなつた時期だつた。

どうやら、三週間前にはこの街に来ていたらしい。そして、五日前まで彼女はこの街に滞在していた。見事に行き違いのような形になつてしまつたらしい。

それから後の数枚は、事件や噂話のことが書かれていた。ただ、どれもただの強盗や殺人。しかも、解決されたものばかり。噂となつていたのも、低俗なもので、その昔、日本国で流行つていたらしい『学校の七不思議』とかいうものと並ぶほどであった。

ミズキは溜息をつきながら、ページをめくつた。次が最後のページだ。

どうやら、他にめぼしい情報は一つもなさうだと、諦めかけていたその時、ある未解決事件のことが書かれていた。

その事件のことを全く知らなかつたミズキの目はすぐに書かれた文字を追いかけ、一分とかからないうちに、その内容を読み取つた。思いもよらない情報に、口角が少しだけ上がる。

事件の内容はこうだ。

三週間ほど前から、殺人事件が起きている。一週間に一度若い女が殺されているらしい。犯行は夜に行われ、殺された女は皆、処女

だつたという（どうしてわかつたのかは、ご想像にお任せする。被害者の知り合いがそう言つたのか。それとも駆けつけた警備部隊が下衆だつたのか・・・）。死因は失血死で、死体を発見した人によると殺された女は、首に切り傷があつたというが、血が現場に一滴も落ちていなかつたという。あとで死体を調べると、体の中に一滴の血も残つていなかつたらしい。

一人の犠牲者を出したのち、その事件はぱたりと止んだ。

そして、これは北の街から来たという旅人の話だが。最近、明らかに同一犯と見える事件が、北の街でも起きたらしい。街の若い娘は皆、夜の街を出歩こうとはしなくなつたようだ。

吸血鬼の仕業だとか、魔女が儀式のために処女の血を集めている、とかいう噂も流れていた。

「アーネスト、よくやりました」

「？ どうじうことだ？」

「調査結果です。もしかして君、自分で調査していて気が付かなかつたんですか？」

ミズキは目を丸くして言つた。まさか、これに気が付かないとは・・・。

「よく読んでください」

そう言つて、アーネストに調査用紙を突き出す。

「リーンベル・ローズヴェルトがこの街に来たのは三週間前。そして、この事件が起き始めたのも、三週間前。それに事件が止んだのは、リーンベル・ローズヴェルトがこの街を去つてからです。そして、

アーネストは、はつとした。ミズキの言つていることが理解できただのだ。

「時期が重なつていいー！」

「そう、その通りです。リーンベル・ローズヴェルトが北の街に移

動してから、北の街でも事件が起きた

「つまり、何らかの形で、そのリーンベルとい少女が関わっている、と？」

ミズキは小さく頷いた。

「ええ、彼女がやつたのではないとしても、少し厄介なことになります」

言つた言葉とは裏腹に、アーネストにはミズキが楽しんでいるよう見えた。

「さて、そつとわかれば早く準備をしないと」

ミズキが手を叩きながら言つた。

「準備？ 他に何か必要な物もあるのか？」

アーネストは不思議そつな顔をする。

「君はそんな軽装で北に行くつもりですか？ 間違いなく死にますよ？」

彼の服装は、タンクトップにシャツを羽織ったラフなものだ。だが、そんな服装で北へ向かうのは自殺行為に等しい。

「なんだ？ そんなに危険なのか？」

「危険というより、寒いんです。コート一着ぐらい持つておかないと・・・。僕のもう一着のコートを貸してもいいんですが、サイズが合わないだろうし・・・」

ミズキはアーネストを見上げた。一人の身長の差は十センチ以上違う。それにミズキは少しタイトなものを好んで着るので、ミズキの服をアーネストが着ることができないのは確実だろう。

「コートなら一着持つている

アーネストはそつ言つて自分の部屋からベージュのコートを取つてきた。

「じゃあ、行きましょうか。北の街へ」

「寒い」

ミズキは呟いた。背を丸めて歩いていた。

「寒いと言つても、意味ないんだからやめてくれ」

アーネストはうんざりしたような表情で言つた。この街に入つてから、ミズキが「寒い」と言つた回数は既に一桁を超えていた。

「意味がないからこそ、言つたくなるんです」

沈黙。

「そういえば、ミズキ。初めて会つたとき『匂い』がどうとか、言つていなかつたか?」

「なぜ急にそんなことを?」

「何か話していいないと、寒い」

「・・・・」

ミズキは溜息をついた。

「『匂い』と言つても、実際に何かの香りがするわけではあります。そういう感覚がする、といつだけの事です」

淡々と答えた。

「それで、何か『匂い』に意味はあるのか?」

「『匂い』のイメージによつて、主に相手の心理状態を知ることができます。これも、何となくですけどね」

ミズキは両手に息を吐いた後、コートのポケットに入れた。

「『匂い』自体は感じる時と、感じない時があります。今は、何も感じません」

「意外と不便だな」

「ええ、でも僕はこれに頼るつもりはありませんし、感じ取れたときはラツキ程度にしか思つていません」

「そういうものか」

「やつこつものです

長い時間歩き続けて、ようやく街の光が見えてきた。やはり、バイクが壊れたことは痛かった。何より、移動時間の短縮にもなるし、こんな不毛な会話を続けることもなかつただろう。

ミズキはちらりとアーネストを見た。

アーネストはようやく見えた街の光に、安堵の表情を浮かべていた。

「街に付いたら、どこかに飯を食いに行こう。もう腹が減つて仕方がない」

「一時間前、携帯食料を食べたでしょう

ミズキは溜息をつきながら言った。

「あんな不味い物で腹が満たされるか。固いし、粘土のような味がするし、お前はよくあんな物が平気で食えるな？」

「粘土を食べたことがありますか？」

ミズキが眞面目な顔で聞いた。アーネストは顔をしかめる。

「単なる比喩だよ」

「僕も平気で食べている訳ではありません。我慢しているだけですよ。不味くとも、ある程度は栄養も摂取できるし、腹も膨ら

」

「ああ、腹減った・・・」

そう言つたアーネストに、ミズキは携帯食料を投げつけた。

第九話 捉えた目標（後書き）

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十話 誰が為に雪は降る

『見渡す限りの銀世界。

誰が為に雪は降る。

雪が解けることはあるだろ？

解けるとどうなるのだろう。

世界が変わつて見えるかな。

寒い、寒い夜の事。

赤い、赤い地面に座る、

泣き疲れた少女が一人。

真っ黒なドレスを身に纏い、

白い雪を見つめる。

雪なんて、

積もらず溶けてしまえばいいのに。』

ようやく到着した、北の街『ナシェル』。

今まで雪一面で、地面が見えなかつた。だが、ナシェルの門をくぐつた直後から、地面のタイルがはつきりと露出している。道がは

つきりと見えるよつになつてていたのだ。不思議に思つたミズキはタイルに触つた。

仄かに暖かい。それに、今さら気が付いたが、気温も外に比べると少し高い気がする。

「すみません。そこの方」

ミズキは近くを歩いている老人に声をかけた。老人は振り向き笑顔を見せた。寒さのせいで鼻が赤くなっていた。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん？」

お嬢ちゃん、という言葉に一瞬反応しかけたが、何とか堪えることに成功した。間違われるたび、訂正していくにはキリがない。

「街の外は雪が積もつているのに、中に入ると途端に地面が現れます。それに暖かい。この街の地面はどうなつているのですか？」

「なんだい、あんたたち一人ともナシエルは初めてかい？」

「ええ」

二人は同時に頷いた。

「ここには炭鉱都市でな。ほらあそこ、山が見えるだろ？ あそこが炭鉱なんだ」

老人は街の西にある山を指さした。

「それが、何か関係しているんですか？」

「まあまあ、そう急かすな」

老人は笑つた。

「あの山は昔から石炭がよく取れる。他の街にもたくさん売つてはいるが、それ以上に余つてしまつ。そこでナシエルの長が考え出したのが、この床暖房システムなのだよ」

「床暖房？」

「そう、床暖房」

老人はまるで自分の息子の自慢をするかのように語る。

「各家中に石炭を無料で配給して、暖炉で一日中、炊いてもらひう。そして、暖まつた空氣の一部が煙突ではなく、街の地下に張り巡らされている排気管を通るんだ。そして、その空氣が地面を温め、雪を

溶かす。ついでに気温も少し上がる・・・いや、まったく。素晴らしいシステムだよ」

ミズキはその話を楽しそうに聞いていたが、アーネストの頭は既にパンクしていた。

「地盤沈下などの心配はないんですか？」

ミズキが聞く。

「地盤沈下？ うむ、すまないが私はあまり学がないのでな。その心配については全くわからない」

老人は申し訳なさそうに言つた。

「ミズキ、早く飯を食おう」

アーネストが横から割り込んできた。

ミズキは猫舌だ。熱いコーヒーが飲めない。この世で一番ぐらいに好きなものなのに、淹れ立てのコーヒーを飲めないのは、残念で仕方ない。ミズキは煙草を吸いながら、まだ飲める温度にまで下がらないコーヒーを見つめていた。

正面に座っているアーネストは、もう既に店のメニューを一品も平らげていた。

結局、ミズキの反対を「大丈夫」の一言で片づけたアーネストは、近くのレストランに入つて行つたのだ。

店の様子はミズキの予想していた通りだつた。ナシエルのバウンド・ハンターたちが大勢いたのだ。掲示板もあり、バウンティ・ハンターの詰所になつていた。

ミズキはこのような場所が嫌いだ。騒がしすぎる。本音を言えば、入りたくもなかつた。

そのため店に入つてからミズキは、頻繁に小声で毒づいていた。とはいっても、店の一一番奥の席に座っている男から、視線を感じているからでもあった。

「ミズキ、まだ飲まないのか？ 冷めてしまつぞ」

遅れてコーヒーを注文したアーネストは、運ばれてきてすぐにコーヒーを飲んでいた。ミズキはその様子を恨めしそうに見つめる。「猫舌なんです。熱い物は、僕の天敵です」

「へえ」

アーネストは興味の欠片もなさそうに言つた。

しばらくして、コーヒーを飲み始めたミズキ。アーネストは席を立つ。

「どうしました？」

「ちょっと、トイレに行つてくる」

「気を付けてくださいね。さつきから、あの隅にいる男。僕たちを見ています」

アーネストの表情が曇る。

「『匂い』か？」

「違います。単なる洞察力です。とにかく、襲われそうになつたら、僕のどこまで逃げてきてください。絶対に面倒は起こさない」と

「わかつた」

そう言って、アーネストが動き出すのと同時に、ミズキたちを見ていた男も動き出した。ミズキは気づかないふりをして、コーヒーを飲む。

気づかれないように目だけで、男の動きを追つた。男はアーネストとすれ違う瞬間、横目で彼を見る。だが、アーネストに何かをする気配はなく、真っ直ぐにミズキのいる机に向かつて歩いてきた。

どうやら、狙いはミズキのようだ。

ミズキは小さく舌打ちした。

アーネストが襲われても、逃げたり、ミズキが助けに入ったりすることはできる。

だが、ミズキに狙いがあるのなら、トイレに入ってしまったアーネストにはこちらの状況はわからない。つまり、アーネストがこちらに気づくまでは、逃げ出すわけにはいかないのだ。

体格や身なりから判断すると、男はバウンティ・ハンターのようだ。とはいっても、こうじつた飲食店などに来る客自体、貴族やバウンティ・ハンターのように、生活に困っていない物しかいない。男はミズキより三十センチ近く背の高い大男で、筋肉は服の上から確認できるほど発達している。着ている服もそれなりに高そうな物で、腰には彼の武器であるう剣が吊るされていた。

まともな力比べでは、ミズキの負けが見えていた。ミズキにはスピードはあっても、力と体力はない。それを補うための銃である。「変わった髪の色をしているな。赤髪って言うんだろう？ 確か、魔女か魔物との混血だつていう噂が昔あった・・・。ところで今、暇かい？」

「いいえ、連れがいます・・・」

ミズキは声をかけられたが、そっけなく返した。今回も性別についての訂正はやめておいた。

「もしかして、さつきの冴えない顔をした兄ちゃん？」

「ええ・・・」

「そんなやつ放つておいて俺と一緒に来ないかい？」

男は品のない笑みを浮かべる。一瞬、ミズキはどうして、この男の笑みに品がないのかを考えた。

男はゆっくりと、ミズキの顔に手を伸ばした。

「遠慮しておきます」

ミズキは男の手を払う。

気が付くと今まであれほど騒がしかつたはずの店が、今は静まりかえっている。食器の触れ合う音しか聞こえない。全員がミズキと男に注目していた。

それも、ほとんどの者が、男と同じ笑みを浮かべていた。残りの者は、ミズキに哀れみの目を向けている。どうも気に食わない目だ。

「おい、見ろよ。あいつまた、女に手を出そうとしているぞ」

「あの女、変わった髪の色をしているな」

「そういえば先週は何人だつた?」

「三人だ。そのうち死んだのが一人」

「毎回のよう^{いそ}に殺すな? いつ殺しているんだ?」

「行為に勤しんでいる最中」

「もつたいねえ・・・」

「かわいそうに、あの娘も同じことをされるのか」

そんな会話が聞こえてきた。

なるほど、この男の目的はミズキの身体のようだ。ミズキは吐き気を覚えた。そして、理解した。この男の笑みに品がない訳を・・・。

ミズキの追い求めている『あの男』に似ているのだ。

「意外に気が強いんだな。だが、そういう方が俺の好みだ。・・・あの男、ハンターか? 貧弱そうだな。おまけに身なりも悪い。あまり稼げていないんだろう? 俺はナシエルでは名の知れたハンターでね。何が欲しい? 服? 食い物? 宝石? 欲しい物何だつて買つてやる。もちろん、その後の事も満足させてやる。だから、俺と一緒に來い」

「ええ、間に合つてます。だから、結構です」

ミズキは答えた。何が間に合つてているのか。自分で言つておいて笑いそうになつてしまつた。

「断つた。あの女、断つたぞ」

「あいつ、またキレだすんじゃないか?」

「かわいそうに、一度田の奴の誘いを断つた女で、生きていたやつはいないと言つのに」

その言葉に交じつて、ミズキと男に対しての笑いが起つた。

「連れが来るので」

そう言つてミズキは席を立ち、男の真横を通り過ぎる。ミズキのあまりにもそつけない態度に、また笑いが起つた。

「貴様・・・！」

男がミズキの肩をつかんだ。

ミズキの目が見開かれる。一瞬反応が遅れた。

肩をつかまれたせいだ。

力いっぱい、男に引き寄せられる。

「今、この場で犯つてもいいんだせ！」

男がミズキの胸倉をつかみながら怒鳴る。ミズキは力なく俯いていた。

「・・・・・るな」

ミズキが口を開く。小さな声で聞き取れない。笑いが包んでいた店の中は、また静寂に包まれた。

「ん？」

男が不思議そうにミズキの顔を覗き込む。

「汚い手で僕の体に触るな！」

ミズキは男に怒鳴り、同時にコートの袖口に隠していたナイフで、男の腕を斬りつけた。

血が迸り、男はたまらずミズキを放した。

ミズキはさらに一步踏み込み、後退した男の頸動脈に、ナイフの切つ先をピタリと当てる。

男の首にナイフの切つ先が徐々に埋まる。血が少し流れていった。

男は恐怖に顔を歪めた。

「ミズキ！」

アーネストが、ミズキに駆け寄る。

ミズキはアーネストの姿を見ると、無言でナイフを袖口に納めた。

カウンターに適当な額の金を置き、ミズキは出口へと向かう。

「どうした？ 面倒を起こすなと言つたのはお前の方だろう？」

心配そうに肩に手を置いたアーネストだったが、すぐに振り払われた。

ミズキは脈拍と息が上がっていることに気づいた。

怒つたせいだと自覚する。あれは完全に自分の不注意だった。そのせいであんな結果を招いた。「めんなさい」と何度も謝罪の言葉を胸の中で呟いた。もちろんそれは、アーネストに向けた謝罪の言葉ではなかつた。

アーネストは横目でミズキの様子を窺つた。ミズキと出会って、まだ一週間もたっていない。だが、ミズキが表情を変えるときはあつても、感情をあまり表に出さないことは既に知っていた。

そのミズキが今、とても憂いに満ちた表情を浮かべていた。

ミズキは雪の降る空を見上げた。

白い雪はこの空の下にいる、誰の意志も関係なく振り続けていた。

第十話 誰が為に書は降る（後書き）

冒頭の独白のような部分ですが、私のイメージと少しズレがあつたので、第九話の途中から、今回の話の冒頭に移動させました。突然の変更、申し訳ありません。

途中で『床暖房』という言葉が出てきますが、これは『ANOTHER SKY』の世界での床暖房です。実際の物とは恐らくかなり違いがあります。

感想、評価、ダメだし、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十一話 黒のドレスに月夜の呪文

『黒いドレス

纏つた子。

みんなはその子、

追いかける。

追つても無意味。

でもやめない。

追手は必死。

でも無意味。

あの子は笑う。

月夜に笑う。

笑えば響く、

可笑しいね。

』

ミズキとアーネストはあの後、宿に向かい部屋を借りていた。
ミズキは部屋を借りるときに偽名を使った。

「おい、その名前

「偽名です」

ミズキが名前を書いている時に、アーネストが小声で聞いた。
「後で面倒なことが起こってもいいよ」と・・・

ミズキは答える。

「じゃあもしかして、『サエバ・ミズキ』も偽名か?」

「それは、

」と一瞬口を閉じる。

「本名です・・・」

アーネストは気が付かなかつたが、ほんのわずかな時間、ミズキは答えるのをためらつた。

一人は行動しやすいという理由から、同じ部屋に泊まることにした。アーネストがベッドに座ると、ミズキが近づいてきた。

「シャワーを浴びてきます。僕が出たら、すぐに出掛けられるように、準備していくください」

「出掛ける?」

「君はここに観光で来たんですか? 仕事です。目撃者がいるようなので、聞き込みに行きましょう」

そう言つて、ミズキは着替えの入つた袋を持つてバスルームに消えた。

しばらくすると、シャワーの音が聞こえ始めた。

アーネストはベッドに寝転がり、コートの内にしまつてある拳銃を取り出した。様々な角度から、人を殺すための道具を見る。

ミズキから、銃を使う時にはどうすればいいかを聞かされていた。目線と銃と一緒に動かす。トリガには撃つ時以外、指をかけない。そして、撃つ時には躊躇わない。

それを実際に行動に移したとき、アーネストは人を殺す。
「できれば、使いたくはないよな
誰もいない部屋で呟いた。

ミズキはシャワーから出る水を浴び続けていた。冷たい水を浴びても、さつきの男に触られた不快感は消えない。何度擦っても消えないのだ。消えないどころか、その不快感は癌細胞のように、徐々に広がっていた。

ミズキはしばらく、水を浴びながら俯いていた。

ミズキの視界には排水溝に流れる水が入っていた。類を伝う冷たい水の中に、何か温かい物が混じる。それはミズキの目から流れていた。

ミズキは顔を手で覆い、少しの間、そのまままでいた。

「のまま体が溶けて、水と一緒に流れてしまえばいいと思った。

ミズキはバスルームから出ると、ベッドで拳銃を手に寝ていたアーネストを起こした。

アーネストは眠そうに眼を擦りながら、コートを羽織り、拳銃をしまう。

ミズキも準備は済ませていたのでコートを羽織った。前のボタンを器用に片手で閉じながら、アーネストに紙切れを渡す。

「なんだこれは？」

「今から目撃者の男性の所に行きます。それは、男性に質問する内容を書いたメモです。君が男性に質問してください」

「何で？ お前が聞けばいいんじゃないのか？」

「こんな顔をしていると、舐められてしまうんですよ」

ミズキは自分の顔を指さしながら言った。

「なるほど。ところで、今日は髪を括らないのか？」

アーネストが聞いた。

いつもミズキは髪をゴムで括っている。だが、部屋を出ようとしたらミズキは、肩まで伸ばした赤髪をそのままにしていた。髪を括っていないミズキは、括っている時より、より女性的に見える。

「髪形ぐらい、僕の自由でしょう？ それとも、括っていた方がアーネスト好みですか？ 残念ですが、僕に男色の趣味はないので・・・」

ミズキは悪戯っぽく微笑んだ。

「俺だつてそんな趣味はない」

アーネストは少し怒ったように言った。

一週間、事件があつたときに、その場に居合わせたという男性の家を訪れた。呼び鈴を鳴らすと、すぐに瘦せた男性が玄関を開けた。「突然すみません。一週間前の女性が血を抜かれて殺された事件について、お聞きしたいのですが」

「またそれか、話せるることは警備隊に話した。俺は一刻も早く、あのことを見れたいんだ」

男性はドアを閉めようとしたが、ミズキがドアにブーツの爪先を挟み込む方が先だった。それを見たアーネストが顔をしかめる。

「大丈夫。安全靴です」

ミズキはアーネストに言った。

「被害者の家族から、依頼を受けて来た者です。彼らは真相を知りたがっています。どうか、ご協力を・・・」

本当は、被害者の家族からの依頼など受けてはいない。さらりと嘘をつくミズキに、アーネストは、今度は違う理由で顔をしかめた。

二人の顔を見た後、男性は渋々ドアを開いた。

応接間のようなところに案内された二人はソファに腰掛け、男性と向かい合っていた。

ミズキは男性に一枚の名刺を渡した。一枚はミズキ。もう一枚はアーネストの物だ。もちろん偽名で書かれており、肩書は、アーネストが探偵。ミズキが助手であった。

「では、早速・・・」

ミズキがメモとペンを準備して、アーネストをちらりと見た。質問を始める、という合図だ。

「事件の様子をできるだけ詳しく聞かせてください」

アーネストが質問を始めた。

「ああ、やっぱりそれを聞かれるのか・・・」

男性は頭を抱え込む。

「俺は実際に事件を見たわけじゃないんだ。ただ、俺が最初に、殺された女を発見したというだけで、事件を見ていたという噂がたつただけなんだ」

「えっ？」

アーネストは声を上げた。

ミズキは無言のままだった。

今の言葉で用意していた質問がほとんど意味をなさなくなってしまった。

アーネストはミズキに指示を仰ぐ。仕方なくミズキはメモ用紙に新しい質問を書いてアーネストに渡した。

「じゃあ、あなたは犯人の姿を見ていないのですね？」

「いや、人かどうかはわからないが、殺された女の近くに何かがいた。暗くてよく見えなかつたが、その目が妖しく光っていたのは覚えている。俺を見た後、すぐにどこかに逃げてつた

「被害者はどのよつな状態でしたか？」

「首に傷があつて、血は出ていなかつた。仰向けに倒れていて、恐怖に見開かれた目が俺を見ていたんだ・・・」

そう言つて男は、震えながら頭をかきむしった。

「もう忘れさせてくれ。殺された女が、毎晩夢に出るんだ。そして、俺を殺そうとする。どうして助けてくれなかつたんだ、と……」

「最後に一つ……」

今度はミズキが口を開いた。

ミズキはリーンベル・ローズヴェルトの写真を男性に見せた。

「この少女を見たことはありませんか？」

「……ああ、見たことがあるよ。この街でみんなに髪が長い女はないから、印象的だつた。真っ黒なドレスを着ていて、大きな荷物を背負つていたな……」

「そうですか。あと、何か他におかしな事件を聞いたことはありますか？」

「最後と言つただろう」

男はミズキを睨んだ。

「ええ、そうでした」

そう言つたミズキは、アーネストを見て首を振つた。もついい、ということだらう。

ソファから立ち上がり玄関に向かつた。

「おい、探偵さん」

「？」

声を掛けられた二人は立ち止り、男性を見た。

「最近、他に連續殺人事件が起きている。最初の事件から一週間、既に三人が殺されている。どの被害者も銃で心臓を撃ち抜かれているらしい。被害者の年齢はバラバラ。たぶん無差別殺人だ」

「ずいぶん詳しいですね？」

ミズキは疑いの目を彼に向ける。男性は顔の前で手を振つた。

「警備隊が役に立たないから、自分たちで情報交換をしているんだ。」

「……」

「そうですか」

ミズキは頭を下げる。遅れてアーネストも頭を下げる。

「ありがとうございました」

一人は男性の家を後にした。

ミズキは男性の話を記したメモを見ていた。アーネストはミズキの後ろから付いて来る。

「どうだつた？」

「ええ、一応、収穫はありました。思ったより少なかつたんですけどね」

ミズキは白い息を真上に吐いた。

「まず、僕は小さなミスをしていました」

不思議そうな顔をアーネストがする。

「探偵と助手の肩書を逆にしておくべきだった」

そう言つてミズキは笑つた。

確かに、途中からあれこれとミズキが指示を出していた。さらに最後にはミズキ自身が男性と会話していた。これではどちらが探偵かわからない。アーネストが助手で、探偵に扱き使われているように見せた方がよかつたかもしれない。

「こら、真面目な話だぞ」

アーネストはミズキを睨んだ。

「僕はいつだって真面目ですよ」

ミズキは笑つて返した。

「とりあえず、事件については同一犯であることはわかりました。そして、リーンベル・ローズヴェルトが、ナシェルにいることも。十分といえば十分なのですが、今一つはつきりしない

「何が？」

「事件を彼女が起こしたという確証が持てないんです。さつきの彼の話を思い出してください。人がどうかわからないと言っていた。つまり、魔物かもしない・・・」

「でも、時期的には重なっている」

「ええ。でも、今のところそれだけです。彼女が魔物を飼つていて、その魔物がやつた、という可能性もありますが」

「魔物を飼う！？」

アーネストが驚き、声を上げる。

「あくまで可能性です。それも、かなり僅かなもの。ああ、どうして僕はこんなことを言つているのだろう？ 君と会つてお喋りになつてしまつた・・・」

ミズキは溜息をついた。

「最近起きている連続殺人事件については？」

「恐らく何の関係もないでしょ。放つておけばいい

「人が殺されているんだぞ？」

アーネストは軽くミズキを睨んだ。ミズキは何ともないという風な顔をしている。

「優先順位を考えてください。僕たちの目的はリーンベル・ローズヴェルトを探し出すことです。他の事件など、気にしている余裕はない」

強い口調で言つた。アーネストは食い下がろうとしたが、ミズキが続ける。

「まあ、彼女を見つけた後なら、別にかまいませんが・・・」

ミズキはアーネストから顔を背けた。そして、また溜息。

「ずいぶん、お人好しになつてしまつたものだと、内心で自嘲した。

「とりあえず、事件についての調査を続けましょう」

「まだ、続けるのか？ 今日はそろそろ休みたいんだが」

もう、太陽が沈み、月が出ていた。

「今日は前の事件が起きてから、何日目でしょうか？」

ミズキが問題を出すように言つ。アーネストはしばらく考え、手

を叩いた。

「ちょうど一週間か！」

「そうです。それに犯行は必ず夜に行われる。今日の調査はまだ続けるべきです」

夜のナシエルは視界が悪かった。街灯は所々にしか設置しておらず、照らされている範囲も非常に狭かつた。エネルギー源に石炭を使っているため、途中で消えている物もある。

これでは街灯の灯りが届く範囲でしか人の顔の判別ができない。あの男性が犯人の顔が見えなかつたのも、仕方なかつた。

「誰もいないな」

「当たり前です。殺人事件加え、無差別連續殺人事件まで発生しているのです。誰も出歩こうとはしませんよ」

ミズキは何か『匂い』がしないか集中した。都合よく、感じ取れるようになつっていたのだ。

見回りを始めて三十分、ミズキはかすかな匂いの変化に気が付いた。

一言で言えば、臭い。人肉の腐つたような匂いだ。

アーネストは気づいていないようなので、この匂いがミズキの能力によるものだとわかつた。

ミズキは無意識のうちに早歩きになつっていた。

「おい、どうした」

「『匂い』がします」

アーネストが息を飲む。ミズキの手は自然と腰に納めてある銃のグリップを握っていた。

徐々に匂いがきつくなる。匂いの元に近づいているのだ。心拍数が上がっているのがわかつた。額には寒いはずなのに汗が出ていた。

突然、乾いた破裂音が聞こえた。

「銃声

ミズキは舌打ちして走り出した。アーネストも後に続く。それと同時に今まで感じていたはずの『匂い』を全く感じなくなつた。効果が切れてしまつたようだ。

仕方なく、音のした方向を頼りに走る。

真つ暗な路地から泣き声が聞こえた。女の声だ。

ミズキはその泣き声の主の元へ急いだ。

たどり着いた所で、少女が座り込んで泣いている。座り込んでいる地面は真つ赤になつていて。見慣れた赤。血の赤だつた。

少女の真つ黒な服も真つ赤に汚れ。髪にも所々血が付いていた。アーネストが近寄ろうとする。ミズキは片手を広げ彼を制止した。疑問の目をミズキに向けるアーネスト。ミズキはもう片方の手で少女の隣を指さす。

そこには、胸から大量の血を出して死んでいる女がいた。

ミズキは泣いている少女に目を凝らした。

見た感じの年齢は十六歳前後。その金色の髪はとても長く、地面に接している。恐らく、立ち上がりれば腰に届く長さはあるだろつ。真つ黒なドレスに身を包み、背には大きな荷物。

目撃証言と何一つ変わりない。

この少女こそ、リーンベル・ローズヴェルトだった。

第十一話 黒のドレスに月夜の呪文（後書き）

ついにリーンベル・ローズヴェルトを発見したミズキたち。しかし、泣きじゃくる彼女の隣には銃で撃たれて死んでいる女が！ 次話、事件はさらに加速する（？）

活動報告に今後の活動について書きました。

活動報告『お詫び』（――）を読んでいただけたら、と思います。

そして、今後の投稿の休止予定です。

8月29日～9月1日の間、連載を休止いたします。

その期間は部活の合宿で、家にいないので更新ができないのです。お待ちいただいている方には申し訳ないことをしています。

どうかご容赦を・・・』（――）

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです。

第十一話 赤い花、胸に咲いた。

『散る散る落ちる、

赤の花。

今宵は誰の

胸に咲く。

咲いた花は、

真つ赤つ赤。

次はあの子。

いいやあの子。

どの子の胸に咲こうかな。

種は男に握られて、

芽吹く時を

待つばかり。

』

ミズキは辺りを見回した。

だが、周りには人影は見えない。いや、見える範囲にいないだけで、本当はどこかに潜んでいるのかもしねえ。

「アーネスト。銃を抜いてください」

ミズキが言った。アーネストは緊張した様子でミズキを見た。

「何をしているんですか？早く、銃を。辺りを警戒してください。

まだどこかに隠れているのかもしません」

険しい表情で言つたミズキに、アーネストはびくりと肩を震わせる。そして、拳銃を震える両手で取り出した。

ミズキは銃を腰に納め、泣き続けるリーンベルに近づいた。隣の女性を一度だけ見たが、撃たれている場所はどう見ても心臓だ。血の量からして、助からない。それに、既に見開かれた目からは光が消えていた。

「リーンベル・ローズヴェルト。貴女を探していました。僕と一緒に来てください」

ミズキはそう言つた後、自分の発言の過ちに気づいた。どう考へても、今、言つべき言葉ではない。リーンベルの隣で死んでいる女性が、見えるところから撃たれたとは限らない。もし、見えない場所から撃たれていた場合、銃声のすぐ後に姿を現したミズキたちが、この女性を殺したと思つても仕方がない。

「すみません。僕たちは銃を所持してはいますが、彼女を撃つたのは、僕たちではありません

今さら遅いか。

聞こえないように小さく舌打ちしたミズキ。リーンベルは首を横に振つた。

「お姉さんたちが殺したのではない。それは、わかっています。」

彼女は震える声で言つた。

「犯人の顔を見たんですか？」

彼女は無言で頷いた。

「急に、男の人気が現れて、私の隣にいた、その人を

「ミズキ、まだか！」

周囲を見回していたアーネストが叫ぶ。彼の声も恐怖で震えていた。取り乱さないだけ、まだマシかもしない。

銃声とともに、近くにあつた街灯が割れた。やはり、まだ近くに潜んでいたようだ。

「ミズキ！」

アーネストがまた叫ぶ。

「話は後です。貴女を保護します。僕に付いてきてください。ここにいては、危険だ」

ミズキはリーンベルに優しく言った。彼女は涙を拭い、首を縦に振った。

ミズキの手を借り、その場に立ち上がったリーンベル。金色の髪は、既に腰に届いている。彼女はアーネストを見た。

「彼は？」

泣き止みはしたが、まだ声が震えている。

「僕の助手です」

ミズキは微笑んだ。そして、彼女の手を握り、走り出す。

「アーネスト、逃げますよ」

アーネストに向かって叫んだミズキ。それとほぼ同時に、また数発の銃声が聞こえ、近くの街灯がいくつか割れた。

ミズキが先頭を走り、その後ろをアーネストと、彼に手を引かれたりーンベルが走る。まだ銃声は聞こえており、街灯もそのたびに割れている。ちょうど、ミズキたちが通り過ぎた街灯が割られていた。

明らかに楽しんでいる。いつでも殺せるということを、相手はアピールしているのだ。それを理解したミズキの背に、嫌な汗が伝う。

既に三人とも息が上がっている。相手は疲れ切ったところで、また姿を現すだろう。そして、恐怖に怯えるミズキたちを順番に殺していくはずだ。

「のままでは、確実に三人とも殺される。」

ミズキは後ろを振り返った。

街灯を割られたせいで、すぐ後ろは真っ暗だ。何も見えない。足音は聞こえないが、恐らく、相手はミズキたちの後ろから追ついている。

前方には分かれ道があった。

小さいが、チャンスがやつてきた。ミズキはそう思つうにして、銃を抜いた。

走りながら銃を両手で構えたミズキは、前に見えるすべての街灯を、正確に打ち抜いた。

「何をしている。真っ暗で何も見えないぞ！」

息を切らしながら、アーネストが叫ぶ。

「静かにしてください。気が付かれたらどうするつもりですか？」

「・・・？」

「僕が囮になります。アーネスト、君は彼女を連れて、右の道を通りてください。僕は左に行きます」

「なつ！？」

「僕たちが泊まっているホテルの道は、わかりますね？　一二手に分かれた後、できるだけ速く、ホテルに戻つてください。ここからは、遠いですが、とにかく走つてください」

「お前はどうするんだ？」

「僕は追手を撒いてから戻ります」

「大丈夫なのか？」

「わかりません。僕が朝までに帰らなかつたら、彼女を置いて逃げなさい」

アーネストが息を飲む。

「そんなことができるか！　必ず戻つてこい！」

「・・・わかりました」

ミズキは苦笑した。そして、分かれ道にたどり着く。一瞬だけ二人は目を合わせ、左右に分かれて走り続けた。

「気を付けて・・・」

リーンベルが小さな声で言つたが、ミズキの耳には届いていなかつた。

ミズキは街灯を銃で打ち抜きながら走った。追手がミズキの方へ来るかどうか、賭けに近い物がある。

だが、相手もミズキが街灯を割つてているのは、姿を見せないようにするためだと、気づいているはず。つまり、そっちの道に、追つている対象がいると考えてもおかしくはない。

自分の方に追手を引きつけられていることを、祈りながらミズキは走り続けた。

ホテルに戻ったアーネストたちは、部屋に閉じこもり、ミズキの帰りを待っていた。部屋は間接照明のみを使用して、カーテンも閉め切つていたため、かなり暗かつた。

血の付いたドレスでは気持ち悪いだろうと思つたアーネストは、とりあえず彼の服を貸し、彼女に着てもらつていた。身長がミズキより少し小さな彼女には、大きすぎるが、何もないよりはいいだろう。

既に五時間以上経過しているが、まだミズキは帰つてこなかつた。時間が経つにつれ、徐々にアーネストの不安も大きくなつていた。

「・・・・・」

「あの・・・」

リーンベルが声をかけた。

「どうした?」「

「シャワーを貸していただけないかしら? その、・・・こんな時に、不謹慎だとは思うけれど、体に付いている血を洗い流したいの・・・」

あまりの事態に失念していたが、彼女は殺された女性の返り血を浴びて、髪や服が汚れていた。上品に聞いてきた彼女に一瞬、見とれながら、アーネストは頷いた。

不謹慎だ。
俺が。

この状況で、少女に田を奪われてしまつた自分が嫌になった。

アーネストはバスタオルをリーンベルに手渡し、ベッドに座り込んだ。

しばらくして、シャワーの音が聞こえてきた。水の音に混じって嗚咽のようなものが聞こえる。きっと、アーネストの前では泣けなかつたのだろう。

彼は会つたばかりのリーンベルより、囮になつたミズキの心配をしていた。彼女には一切話しかけず、関わろうとしなかつた。いや、正確にはリーンベルの存在などすっかり忘れていた。

もうすぐ、日が昇る。

朝が来るのだ。

本当に帰つてこなかつたら？

ミズキはリーンベルを置いて逃げろと言つた。

彼女が今さらになつて、シャワーを浴びたいと言つたのは、ミズキとの会話を聞いていたからだつ。

見知らぬ少女。

自分とは全くかかわりがない。

出会つたばかりで、彼女は俺の名前すら知らない。置いて逃げることは簡単。

だが、この少女は命を狙われているかも知れない。

放つておいたら殺される。

そんな子を、見捨てるなどできない。

ミズキがもし、帰つてこなければ、俺がこの子を守るしかないのか……。

だが、俺にそんなことが可能なのか？

アーネストは頭を搔きベッドに倒れ込んだ。

ミズキは仕事で、リーンベルを探していた。自分はただ、その手伝いをしていただけ。なのに、割り切ることができない。

溜息をついた。

それは、彼が決心したことを表す溜息だった。

次の朝、街の別々の通りで二つの死体が発見された。さらに、その付近で街灯がすべて割られており、殺人事件との関係が疑われている。

一つは女性の死体。首に小さな切り傷があつたが、死亡した原因はそれではなく、銃で胸を撃ち抜かれたからだと推測される。

もう一つは、男性の死体。こちらは損傷が激しく、体中に穴が開いていた。顔面の損傷は特に激しく、体の各部分から、辛うじて男性とわかる程度だった。

恐らく、穴の原因是銃弾によるものとされる。被害者は死亡してからも弾丸を浴びせられており、加害者に非常に強い恨みを持っていた、と分析されている。

それはまた、別のお話・・・。

第十一話 赤い花、胸に咲いた。（後書き）

お久しぶりです、コウです！

・・・・・？

氣のせいでしょうか？

自分で読んでみたのですが、文章の雰囲気が変わった気がします。

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂ける
と非常に嬉しいです。

サブタイトルですが、ちょっと無理矢理感があり、皆様に伝わらぬ可能性があるので、いずれ変更するかもです・・・。m(ーー)m
もし、本文を読んだうえで、サブタイトルを気に入つてももらえたら、活動報告のコメント欄に書き込んでいただければ、変更はしないと 思います。

『異国之地。

異端者たちの、

叫び声。

自由を叫ぶ、

叫び声。

どこに届く？

届かない。

いずれ届く？

届かない。

それでも叫ぶ。

それはなぜ？

118

「加奈子君。どうして、この研究所が、ばれちゃったんだろうね？」
「清隆さん。今はそんなことどうでもいいから、手伝っていただけませんか？」

「嫌だよ。オジサン、喧嘩弱いし。加奈子君の方が強いだろう?」
加奈子は扉を押さえつけながら、植村を睨んだ。彼女の白衣は既

植村は加奈子を抱き寄せた。加奈子は広げた手を植村の腰に回す。力いっぱい抱きしめあつた。植村の白衣に、加奈子が浴びた返り血が付く。

二人は離れて、数秒間見つめ合つた。

二人の距離は再び徐々に近づく。植村は少し腰を曲げ、加奈子は少し背伸びをした。息が触れ合つ距離になると、お互いに目を閉じた。

唇が触れ合つ。

ああ、何ということだろ？

口づけという行為だけで、自分はこの男に愛されていふと感じられる。

ただ、行為だけのはずなのに・・・。
いや、行為だからこそ、伝わるのだろうか。
言葉では伝わらない。

そんなものがあるのだ。

その逆も、また然り。

だが、今は言葉より、行為の方が嬉しかった。
私が私である。

そんな場所は彼の傍しかない。

そう感じさせてくれる。

今、この瞬間が、とてもとても幸せ。

一人はゆつくつと離れる。

すぐに背を向け、新しい煙草を吸い始めた植村に、加奈子は微笑んだ。

「ありがとうございました」

「何が？」

植村は背を向けたまま聞く。

加奈子は一瞬言葉に詰まり、植村には見えないとわかつていながら、もう一度微笑んだ。

簡単なことなのすぐに言えない。実を語つと恥ずかしかったのだ。

不思議だ。なぜか、付き合い始めた時のことを見、少し思い出してしまった。

初めてのキスのような気持ちだった。

「キス。嬉しかったです」

「そうかい。それはよかったです」

そつなく答えた植村だが、それは照れ隠しのためだと言うことを、加奈子は知っている。キスの後、植村は必ず背を向けるのだ。一度だけ、その顔を覗いたことがある。テールランプの様に真っ赤だった。

加奈子はそんな植村が愛おしくてたまらない。研究に没頭する彼も、笑えないジョークを言う彼も好きだったが、キスをした後の彼が加奈子は一番好きだった。

植村は煙を深く吸い込み、溜息とともに吐き出した。そして、加奈子の方へ向く。

既にさつきのことは、すべて忘れ去った顔だった。加奈子は少し寂しさを感じたが、思考を切り替え、無表情で植村の目を見返した。

「現状報告を・・・」

「はい。」

襲撃してきたのは、装備から、日本国の特殊部隊と見て間違ひありません。現在、Cブロックまで制圧されました。連絡が取れている所員は、十数名です。他のブロックで応戦しているのですが、いつまで持つか、時間の問題かと・・・

「どうか」と呟いた植村は、靴底で煙草の火を消した。

「残念だ。非常に残念だよ。みんな優秀な人材だった。それがこんなところで、死んでしまうなんて。・・・今から助けに行くことは

可能か？」

「可能です。ですが、よく考えてください。彼らは何のために戦っているか。貴方の頭脳を護るためです。助けに行って、もしあなたが死ねば、同志たちの死は無駄になります。ここは逃げるべきです」

「・・・・・」

一瞬険しい表情を見せた植村だが、力なく首を縦に振った。

「どうして国は私たちの邪魔ばかりするのだ？ 私はただ、研究がしたいだけ。自分の理論が正しいのか確かめたいだけなのだ・・・」

植村は顔を手で覆い、天井を見た。加奈子はそんな植村に、なんの声をかけることもできなかつた。

植村の研究は日本国、いや世界のどの国でも許されることはないだろう。得られるものはとてつもなく大きいが、倫理的に違反している物が多いのだ。そのため、彼は身をひそめて活動している。しかし、他国からの体裁を、必要以上に気にする日本国は、植村のような異端者を許しはしない。國中を探し回り、始末しようとしてくる。過去に植村のような考えを持つた同志たちも、「ことじ」とく抹殺されてきた。

「また、一からやり直しか」

「やり直せるだけマシです。彼も頑張っているんですよ？」

「復讐を果たすためだけに、ね。だが、君の言つとおりかもしれない。生きていれば、何度もやり直しがきく事もある」

加奈子は、バリケードを作つた反対側のドアを開けた。敵の姿は見えない。深呼吸して廊下に飛び出した。後ろを植村が付いて歩く。

飛び出してきた敵に銃弾を浴びせながら、加奈子は植村とともにこの研究所を脱出するため前進した。

「そう言えば、冴羽の奴。『あの子』には出合えたのだろうか？」
不意に植村が口を開いた。

加奈子は壁を背にして、敵に向かつて弾幕を張つているところだ
った。

「加奈子君？」

「聞いてます。今、話しかけないで つ、弾切れ！？」

最後の弾倉マガジンが空になり、加奈子は舌打ちした。

「残念だけど、僕の方もだ」

「この辺りに、銃を隠している所はありますか？」

「いや、ないね・・・」

一人の声は、攻撃手段がなくなつたと言つのに、少しの焦りも感
じさせない。

「絶体絶命。万事休すか」

植村は腹話術の人形の様な、渴いた笑みを浮かべた。加奈子は溜
息をつきながら植村を見た。

「まだ手はあります。ライタを貸していただけますか？」

「何に使うんだ？」

加奈子は速くよこせと言わんばかりに、手を差し出す。

「『魔法』です」

加奈子の言葉に、植村は目を丸くした。今回の襲撃の中で、植村
が一番驚いた瞬間だつたかもしれない。

「あれ？ 加奈子君、魔女の血を引いてたっけ？」

「ええ。ただし、遠縁なので血は薄いです。髪が黒いのもたぶん、
そのせいです」

「初耳だな」

「聞かれませんでしたから」

ライタを受け取りながら言つ。

「それに、知られたら、夫婦喧嘩の時に使えないでしょ?」

「彼女はくすりと笑つた。植村もつられて笑う。

「制御が難しいので、少し離れていてください」

加奈子はライタの火を点け、目を閉じる。禍々しい空気が彼女を包む。ライタの火は徐々に大きくなり、加奈子が敵に向かつてそれを振つた。

炎は巨大な鞭となり、通路に隠れていた襲撃者たちを次々に無力化していく。そして数回、加奈子が腕を振つたところで、ライタにひびが入り、粉々に砕け散つた。

さつきまで聞こえていた多数の銃声は一つも聞こえず、その代わりに、いつの間にか作動してたスプリンクラーの水の音が、廊下に響いていた。

力が抜けたように、その場に倒れ込む加奈子を、植村はそつと抱き寄せた。彼女は目を閉じ、眠つたように呼吸している。

魔女の力は、血が濃いほど、強くなる。そして、体への負担も小さくなる。加奈子は遠縁に魔女がいると言つた。魔女の血が薄い彼女にとって、今の魔法はかなりの負担を強いただろう。

「君は強いな。私なんかとは大違ひだ……」

植村は加奈子の頭を撫でながら呟く。

「君がいなければ、既に私はこの世にいないだろ? でも、君がもし、誰かに殺されそうになつたら、その時は、」

植村は息を深く吸い込んだ。

「…………」

その時は、せめて私の手で、君に止めをさせてくれ

そう呟いた植村は、目を閉じている加奈子に、そつとキスをした。

唇を離し、加奈子を見つめていると、彼女がくすりと微笑んだ。

「それ、プロポーズの時と同じ言葉ですよ？」

今回は間章と「う」とで、ウエムラとカナコの物語でした。
次話から、第一章です！

アーネストの決心とはいったい・・・。

最近の冒頭部の『』で囲まれた部分ですが、解説のようなもの
は、本文ではしない予定です。
申し訳ありませんが、なんとか推理（？）していただけたら、と思
っています。

そして、冒頭に限らず、本文にはたくさん謎（伏線と言つた方がい
いかも？）を張り巡らせていくつもりです。

「ここつて、こういう意味？」「実は○○？」

という推測や展開の予想は大歓迎です！

感想欄でなくとも、メッセージを送つていただけると嬉しいです！
ところの、私自身がそいつた予想をしては友人にぶちまけちゃ
うやつなのです。

ただ、私はネタバレをするつもりはないので「なるほどー（ニヤニ
ヤ）」「えつ！？（アセアセ）」みたいなあいまいな表現しか返せ
ないかもしれません。あ、でも、冒頭部に関しては推測、予想して
いただいた方や、読者様の要望があれば、活動報告等で解説のよ
なものをしようと考えております。

m (— —) m

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂ける
と非常に嬉しいです。

『わらりわらりと

黒い彼。

煙草の煙
くゆ
燻らせて。

歩くは一人、

闇の中。

偽の仮面、

外す時。

彼は一体どこへ行く。

』

小鳥のさえずる声で、アーネスト・エトワールは目を覚ました。

どうやら、いつの間にか寝ていたらしい・・・。

「ミズキっ！」

自ら囮になり、敵を引きつけ、それ以来帰つてこない友人、サエバ・ミズキを探す。

だが、隣のベッドには、すやすやと寝息をたてている、リーンベ

ル・ローズヴェルトの姿しかなかつた。その枕は少し濡れている。よく見ると、リーンベルの目元から零れ落ちる雫があつた。

アーネストは黙つて、涙を拭つてやる。そして、彼女の頭に手を置き、何度も往復させた。

ベッドから立ち上がり、服を着替えた。

顔を冷たい水で洗い、鏡を見た。

なんて顔をしているんだ。一度決めたことだらう。

頭を横に何度も振り、雜念を振り払う。

何度も頭を叩き、何とか頭に浮かんだことを、忘れようとする。だが、できない。ミズキの心配。これから不安。それらが一気に押し寄せていた。

洗面所から出ると、リーンベルが荷物をまとめていた。背後に視線を感じたリーンベルは、振り向くと、びくりと肩を震わせる。

「あ、あの

「心配しなくていい。俺はあんたに何もしない

アーネストがそう言つと、彼女は下を向いた。

突然、ドアがノックされた。アーネストは飛び上がりそうになりながらも、何とか平静を装い、ドアに向かつた。

覗き穴から誰が来たのかを窺う。それは、少し期待していた待ち人ではなく、意外な人物だった。期待していた自分と、驚いた自分。そして危険がないとわかり、ほっとしている自分に呆れ、溜息が漏れる。

念のため、ドアチャーンはかけておく。

ドアを限界まで開き、部屋の外にいるホテルマンを見た。

「おはようございます。今朝、自治団体から連絡がありました」

「自治団体?」

自治団体 街の住民たちによる組織。主に、事件等の情報を

共有するために、活動しているらしい。

「今朝、いくつか事件があつたようです」

「・・・」

アーネストは緊張した様子で、ホテルマンを見た。彼にもその緊張が伝わったのか、表情が強張っていた。

「一つは女性の殺人事件で、銃で胸を撃ち抜かれていたようです」「これは昨日、リーンベルを見つけた時に、殺されていた女性の事だろう。こちらについては、自分にも情報がある。

「もう一つは、被害者が男性か女性かわからないのですが、こちらも殺人事件です。ずいぶんと質が悪いです」

被害者が男性か女性かわからない。その言葉は、アーネストの心を大きく揺さぶった。

ミズキは一見すると、いや、彼の口から「男だ」と語られなれば、女にしか見えない。しかし、アーネストはミズキと長くいたせいで、男性か女性かわからない人物、と認識してしまっていたのだ。「そんな・・・」

アーネストは一人呟く。その様子をリーンベルは黙つて見ていた。「そして、警備隊は重要視していないようですが、複数の女性が、後ろから何者かに襲われ、眠らされる。という事件も起きます。どうか、お気をつけて」

ホテルマンはゆっくりとドアを閉めた。

ドアの閉まる音と同時に、アーネストはその場に座り込む。最後の事件の話など耳に入つてはいなかつた。

ミズキが死んだ?

それは彼の肩に大きな塊として、のしかかつてきた。

あの時に、もしミズキと一緒にいれば、彼は死なずに済んだのだろうか。

そんな考えが、頭を過つた。

後悔しか出てこない。

座り込んだままのアーネストの肩に、リーンベルがそっと手を置

く。その手の感触。そして、その暖かさに、癒されていく気がした。

自分が心配をかけてどうする。

アーネストは自分を奮い立たせるように、立ち上がった。

「リーンベル」

「はい。あの、どうして私の名前を？」

「ああ、そのことについて。それと、今後の事に付いて、伝えたいことがある」

アーネストは部屋の中にある椅子に座り、リーンベルはベッドに腰掛けた。

「昨日、君と出会ったとき、俺と一緒にいた男を覚えているか？」

「男？ 女の方でしたら」

「あいつは男だ。そう言つていた」

「まあ・・・」

「サエバ・ミズキ、それがあいつの名前。あいつは仕事で、君を探していた。俺はその手伝いをしていたんだ」

「いつたい何のために？」

「わからない。そこまで詳しいことは聞いていない。ただ、依頼で人探しをしている、としか・・・」

「お父様かしら？」

「え？」

「いいえ、こちらの話です」

リーンベルはにっこりと笑う。だが、表面だけの笑みで、どこか寂しさを感じさせる。彼女が、どこかミズキに似ているような気がした。

「ミズキは、自分が朝までに戻らなければ、君を置いて逃げろと言つた」

アーネストはリーンベルの目を真っ直ぐに見た。彼女の息を飲む気配が伝わる。服の裾をギュッとつかんでいた。

目を閉じて、一度大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。

「だが、俺にはできない。放つておけば殺されるとわかっている人

間を、見捨てるなどできない」「

リーンベルの顔に光が宿った。

「俺は君を助けたい・・・」

「ありがとうございます」「

彼女はベッドから立ち上がり、アーネストに抱き着いた。声は聞こえないが、涙を流しているのはアーネストでもわかつた。金色の髪が、ふわりと後から付いて来る。その髪をアーネストは優しく撫でようとした。

その時、

突然。

本当に突然。

誰が予想など、しているものか。

轟音？

銃声？

鳴り響く、

続けて一発。

鍵とドアチエーンが撃ち抜かれた。

「リーンベル！」

アーネストはリーンベルを自分の後ろに隠し、銃を抜く。震える両手で、何とか構え、銃口をドアに向かた。

ゆつくりと、
ゆつくじと、

ドアが開く。

まだ、外にいる人物は見えない。
長い時間かけて、

ドアが開く。

十秒？

一分？

本当は、

もつと短いかもしねない。

汗が額を伝う。

体内の、

警報が鳴りやまない。

手が、ドアにかかった。

その手は、真っ赤。

心臓が跳ね上がりそうになる。

まだ、撃つには早すぎる。

相手が見えてからトリガを引こう。

それからでも、遅くはないはず。

ドアが開く。

「疲れた・・・」

扉の向こう側にいた人物が、顔を見せる。

「え？」

アーネストとリーンベルは、お互いに顔を見合させる。そして、扉にもたれかかっている人物を見た。

サエバ・ミズキが、そこにいた。

「アーネスト。なんでまだここにいるんですか？」

体中、血まみれになつたミズキが口を開く。

「それより、その血は！？」

「ああ、これですか？」

ミズキは乾いた笑みを浮かべる。疲れ切った笑みだった。

「大丈夫。五パーセント程度しか、僕の血は混ざっていません

「じゃあ、それは一体……」

「聞きたいですか？」

ククク、と喉を鳴らして笑う。

「ドア、壊してしまいましたね。すみません、気が立つていたもので……」

「今は、別にどうでもいい。なにか手伝えることはあるか？」

「そうですね。……いや、今は眠りたい」

意識を失つたかのように、ミズキはその場で眠ってしまった。

第十二話 無知 優美 疲労（後書き）

う～ん。

未だに、リーンベルをちゃんと書けないです。
早く書きたい人なのにな・・・。

サブタイトルですが、毎回一応、少なからず意味があります。（笑）

次話

目的達成？

リーンベルは大人しくついてきてくれるのか・・・！？

因みに、次話から『願い事』のような、キャラとの会話を後書きに
載せていいたいと思います。

あ、あと、もしよろしければ、私の活動報告『優しい嘘とは・・・。

』を読んで、協力していただけないでしょうか？

詳しくは9月10日『優しい嘘とは・・・。』で、お願ひします。

m（――）m

感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂ける
と非常に嬉しいです。

第十四話 Merry Go Round

「ミズキさん。ご飯、食べないんですか？」

「ええ。僕はお腹すいてないので」

そう言つとミズキは、ぬるくなつた「コーヒー」を啜^{すす}つた。リーンベルは心配そうにミズキを覗き込む。

「でも、少しは食べた方がいいのではないかしら？」

「リーンベル。放つておけ、ミズキは喫茶店ではコーヒーしか頼まないんだ」

アーネストが横から口をはさむ。

「まあ、そうなのですか？」

ミズキは軽く頷いた。

「こいつと一緒に行動するようになつて、何度も一緒に店に入ったが、いつも「コーヒー」だけだつたよ」

「僕が何を頼もうと勝手でしちゃう？」

「まあ、それもそうだな」

ミズキはポケットから煙草を取り出して火を点けた。その様子をリーンベルが凝視している。

「もう、体の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫でないように見えますか？」

「いや……」

確かにホテルに帰つてきた当初は、血まみれだったミズキだが、シャワーを浴びた後にはすべての血が消えており、頬にあるかすり傷のようなもの以外、怪我はなかつた。どうやら、「五パーセント程度」と言つていたのは、嘘ではないらしい。

「ところで、リーンベル。そのリュックサックの中には何が入つているんですか？」

ミズキは、リーンベルの隣に置いてある大きなリュックサックを指さした。

「これですか？ 本が入っています」

「一冊だけ？」

「ええ」

「もしよかつたら。読ませていただけませんか？ 僕も本が好きなんです」

「申し訳ありませんが、それはできません」

「どうして？」

ミズキはリーンベルを怖がらせないよう、極力優しく聞いた。

「・・・・・」

リーンベルは沈黙したまま、アーネストの袖を引っ張った。アーネストは驚き、ミズキは溜息をつく。

「アーネスト。君と言う人は・・・」

「違う、俺は何もしていない！」

「わかりました。読ませてくれなくともいいです。内容だけでも少し教えてくれませんか？」

「それくらいなら・・・」と言ったリーンベルは、リュックサックの中から古ぼけた本を取り出した。かなり分厚い本だ。日本国の大広辞苑と同じか、それ以上の分厚さだと、ミズキは思った。

「これは、封印書です」

「封印書？」

「ええ。危険な、物や魔物を封じるための方法が書かれた本。私はこの封印書に書いてあることをやりなさいと、言っていたの」

「誰に？」

「・・・・・」

リーンベルはまた口を閉じ、下を向いた。

「なあ、ミズキ。あんなことがあった後なんだ。気になるのはわかるが、もう少し気を使ってやってもいいんじゃないかな？」

「君は、甘いな」

ミズキはそう言って、コーヒーを飲み干した。

「本は好きですか？」

ミズキが聞いた。

「ええ。大好き。今まで、たくさんの本を読んできたわ」
恐らく、気を使ってやつてているのだろうと、アーネストは思つ。

「どんな本が好きですか？」

「物語が好き。あ、でも、論文も好きね。あと・・・そり、辞書も捨てがたいわね」

「辞書？」

「ええ、この国の物だけではなく、外国の本も好き。いろいろな言葉を知ることができるわ。ミズキさんつて、日本国の人よね？」

「ええ、そうですが。何か？」

「私、『国語辞典』も読んだことがあります」

「へえ、珍しいな。俺なんて、物語すらまともに読んだことないのに」

アーネストが感心する。

「そこ、感心するところが違いますよ」

ミズキが言つ。

「どうして？」

不思議そうな顔をするアーネストに、ミズキは耳打ちする。

「さまざまの国の辞書を読める、と言つことは、その国の言葉を理解できる、ということです。彼女、凄い語学力を持つています。それに論文を理解できるのも凄い。とんでもなく頭が良いんですね」

「そうなのか」とアーネストは呟く。

リーンベルは楽しそうに、今まで読んできた論文の話をする。ミズキは何とか話に付いて行けたが、アーネストに至つては田を回していた。

リーンベルの話がようやく終わり、それと同時に、ミズキは煙草に火を点けた。また、リーンベルがその様子を凝視している。

「ねえ、ミズキさん？」

「はい」

「煙草を一本いただけないかしら？ 私、煙草を吸つてみたいわ」煙草の箱に手を伸ばすが、ミズキがさつとポケットの中にしまった。

「駄目です。煙草は体に悪い」

「じゃあ、何故、貴方は今も吸つてているの？」

「どうしてでしょうか。早く死にたいからかもしれません」リーンベルの問いに、ミズキは笑いながら答えた。

「まあ、私をからかうのね？」

リーンベルは顔を少し膨らませた。

「いいえ、からかうだなんて、とんでもない。実際に煙草一本で、人の寿命は五分縮むと言われています」

「じゃあ、一回、煙を吸いこむだけ。お願ひ」

両手を顔の前で合わせ、彼女は首を傾げる。どうやら、彼女は合掌の意味を知っている様だ。これも、本で読んだのだろうか。

ミズキは、そんなことを考えながら、まだ半分も吸っていない煙草の火を揉み消した。

「あつ！」

リーンベルは声を上げる。

「駄目です」

ミズキは微笑みながら言った。

「ミズキ。こんなところでゆっくりしていて大丈夫なのか？」

アーネストは不安そうな顔をミズキに向けた。

「ええ、大丈夫です。もう、追手の心配はありません」

「どうしてそう言い切れる？」

「帰ってきたときの、僕の状態を忘れましたか？」

帰ってきたときのミズキの状態。血まみれになつて、帰ってきたミズキ。だが、自分の血は五パーセント程度しか含まれていない、と言つていた。

つまり、追手を殺した。血まみれになるような殺し方をした、と

いうことだ。できれば、そんなことは想像したくなかった。

「なんて顔をしているんですか？」冗談ですよ

ふつとミズキが笑う。

「からかうのはよせ」

リーンベルはずつと二人の様子を見ていた。

「二人とも、仲がよろしいのね」

首を横に傾けながら言う。

「別に、僕はそう思つていませんが・・・」

「俺だつて思つていなさい」

一人はお互ひを横目で見ながら言った。

「あら、そうかしら？ 少なくともアーネストさんは、ミズキさん

のことを、好きでいるようだけれど」

「アーネスト、君という男は・・・」

ミズキが呆れた顔で、アーネストを睨んだ。心なしか、さつきよりもアーネストとの距離が離れている。

「そんな訳ないだろう！　おい、リーンベル！」

「あら、違うの？　ホテルに戻った時、私の事なんか気にかけず、ミズキさんの心配ばかりしていたくせに・・・」

「それはそうだが、言葉が足りていない」

「ああ、とリーンベルは頷く。

「ごめんなさい、言葉が足りなかつたわ。友人としての『好き』よ『なるほど』そういうことですか」

「当たり前だろう」

アーネストは溜息をついた。

意外と彼女はトラブルメーカーなかもしれない。

「もう、止めましよう。こんな不毛な会話は」

ミズキが無表情で言つた。リーンベルは一人を見ながら、くすくすと笑つていた。

「ところでリーンベル。あなたに聞きたいことがあります」

リーンベルは不思議そうな顔で、ミズキを見た。

「あの時、何があつたのか。できるだけ、詳しく教えてください」

ミズキは無表情だつた。

「あの時・・・」

俯いたリーンベルの身体が次第に震えだす。彼女は自分の体を抱き、震えを抑えようとした。

「ミズキ。追手が来ないのなら、それは別の機会でも、いいんじや

ないのか？」

アーネストが心配そうに口をはさんだが、ミズキはそれをすぐに否定した。

「いいえ。確かに、追手は来ませんが、必要なことです。リーンベル、話してくれますね？」

ミズキの厳しい口調に、リーンベルは肩を震わせた。そして力なく頷いた。

「あの時、私は、あのお姉さんと話をしていました。いつだつたかしら？　お姉さんの、顔が恐怖で歪んだの。私は何があつたのかわからなくなつて、とにかくお姉さんを落ち着かせようとして、近づいたわ。でも、彼女は後ずさりした。そして

「撃たれたのか？」

アーネストが小さな声で聞いた。

彼女は小さく頷く。

「突然のことでの驚いて。後ろを見ると男の人が・・・」
そこまで言って、リーンベルは顔を手で覆つて泣き出してしまった。声こそは殺しているが、ミズキには肩の震えでわかつた。

「彼は、あなたを追つているようでした。何か心当たりはありますか？」

彼女は俯いたまま、首を横に振つた。

「いいえ。何も・・・」

その時、僅かにアーネストの中に引っかかるものがあつた。ミズキが依頼で、リーンベルを探していると伝えたとき。彼女は何かを呴いた。何を呴つたかまではわからなかつたが、何か思い当たる節がなければ、あのタイミングで呴くことは、普通ではないだろう。「そうですか・・・。では、最後にもう一つ」と、ミズキは煙草の火を消した。

「僕はある依頼で、あなたを探していました。依頼主の所まで、連れて行く必要があります」

リーンベルは涙を拭い、ミズキを見た。

「私にその必要はありません」

強い拒否の言葉だった。二人の間に流れた不穏な空氣に、アーネストは息を飲む。

しばらく沈黙が続いた。

ふつと息を漏らすリーンベル。

「わかりました。あなたに付いて行きます。そうでもしないと、縛り上げてでも、連れて行かれそう。但し」と、彼女は目を閉じた。

「私にも成さねばならないことがあります。それが終わってからでもよろしいですか？」

「成さねばならない」と？

「お父様から、申しつけられているのです。封印書に書いてある、素材を収集して来いと」

「なるほど。それは、すぐに終わりますか？」

「ええ、この街の近くに、鉱山があるのでしう。そこにある、鉱石が最後の素材なんです」

「わかりました。協力しましょう。僕も穩便に事を済ませたい」

「よかったです。ミズキさんなら、そう言ってくれると信じていました

リーンベルは微笑んだ。

「出合つたばかりなのに？」

ミズキも微笑む。

「ええ。出合つたばかりなのに、不思議ね」

アーネストは胸をなでおろしていた。

「そうとなれば、早速、準備をしましょう。明日には出発しますよ」ミズキは椅子から立ち上がりながら言った。

「もう少し、ゆっくりしてもいいのでは？」

「言い忘れていましたが、僕には時間があまりないんです。期限までに、あなたを連れて行かなければならぬ」

「その期限は？」

「あと、一ヶ月」

「まあ、それは急がなければいけませんね」

席を立ち、料金の支払いに行つたミズキのポケットから、一枚の写真が落ちた。リーンベルがそれを拾い、じっと見る。それは、ミズキと黒髪の少年が笑顔で写つてゐる写真だった。

アーネストがそれを覗き込む。

「なんだ、ミズキ。お前、こんな顔もできるんじゃないかな？」

その写真に写つているミズキは、いつものような笑顔

意

識して作つた笑顔ではなく、心からの笑顔の様に見えた。

「勝手に人の写真を見ないでください」

リーンベルの手から写真を取り上げる。

「お友達ですか？」

「ええ。古い友人です。もう、亡くなつてしましましたが・・・」

「あ、すみません。その・・・」

「いえ、気を遣わなくとも大丈夫。それに、亡くなつてゐると、言つても、半分は生きていますし」

アーネストには、その言葉の意味が全く分からなかつた。

「あの頃はよかつたな」
そう呟いて、微笑んだミズキ。

どこか寂しげな、その笑顔は、やはり作られたものにしか見えなかつた。

第十四話 Merry Go Round（後書き）

今回、編集により、いつもより長くなりました。
田常パート、とこりやつかもしれません。

久しぶりに、ミズキと黒髪の少年の写真が登場です。
もしかして、忘れていた方もいるのではないでしょうか？（笑）

では『AS』では今回初めてとなる、キャラのトークです！

ミズキ　　ミ
アーネスト　ア
リーンベル　リ
コウ　　コ

次回の後書きからの参考にしてください！

リ「感想、評価、誤字脱字の指摘や作品に対する意見等を寄せて頂けると非常に嬉しいです」
コ「え？ なに勝手に終わらせるの〜！？」

第十五話 伸ばしたそのまま届かない。（前書き）

今更ですが、縦書きで読んでいただけると、嬉しいです。

第十五話 伸ばしたその手は届かない。

『「瑞姫、瑞姫、瑞姫！」

彼は手を伸ばす。

「道流、道流、道流！」

高い声で、彼の名を呼んだ。

「瑞姫・・・！」

「道流・・・！」

お互に手を伸ばす。

もう少しで、手が届く。

しかし、

一人の手は、触れ合つことはなかった。

聞こえたのは、男の笑い声。

最後に聞こえたのは、悲鳴と銃声。

「おい、あんたたち！」

男性から声を掛けられる。辺りが暗いので、顔がよく見えない。

「俺たちか？」

「僕たち以外に、誰がいますか？」

ミズキは呆れたように言った。確かに、周りには、男性とミズキたちの四人しかいなかつた。

男性がミズキたちに近づく。ミズキが警戒していないとこらを見ると、害のある人物ではないのだろ？

「あなたは、昨日の・・・」

事件の目撃者と言っていた男性だった。

「どうかしましたか？」

「いや、自治団体の方に行つてみると、新しい事件が起きたという情報を手に入れた。帰り道だつたんだが、ちょうど君を見つけたものだから」

「よく、僕だとわかりましたね？」と言つても、まだ昨日の事でしたか

「いや、印象的だつたからな。その・・・」

「赤髪ですか？」

「ああ、いや。誤解はしないでほしい。ただ、珍しいと思つただけで、差別的な目を持つて見ていたわけではない」

男は大袈裟に顔の前で手を振る。

「大丈夫です。珍しい、ということは認識しています」

ミズキは口角を少し上げる。男もほつとした様子で、話を続けた。

「その子は、昨日の写真の？」

男はリーンベルを見ながら言った。リーンベルは男に微笑みかける。

「ええ。そうです。ところで事件があつたと言つていませんでしたか？」

「ああ、そうだ。すまない。話が反れていた。・・・昨日の夜中から今日の明け方の間に、男が一人殺された。それはもう残酷な殺され方だつた。何しろ体中が穴だらけだつたらしいんだ」

ミズキは無言のまま聞いている。アーネストは口を押え、リーンベルは彼の袖を握っていた。

「そう言えば、昨日でまた一週間経つていたんだが、女が血を抜かれて死ぬ事件は、起こらなかつたな。あんたたち、解決したのか？」

「いえ、解決はしていません」

ミズキがすぐに答える。「そつか」と男は頷いた。

「そして、もう一つ」「

それは、アーネストが朝ホテルマンに聞いた話と同じものだつた。ミズキは今回聞くのが初めてのはずだ。それに事件の話を聞こうとしたのはミズキ自身である。しかし、アーネストには、ミズキがほとんど興味を持つていよいよに見えた。

はつと目を覚まし、飛び起きる。手に銃を握り辺りを見回す。しかし、そこには規則仇しい寝息を立てるリーンベルとアーネスト以

外誰もいない。

「夢か・・・」

額の汗を拭う。

嫌な夢だ。

思い出したくない。

でも、忘れるわけにはいけない。

そんな、過去。

この呪縛から解かれる日は、やつてくるのだろうか。

いや、そもそも

「 僕にそんな資格はない」

ミズキはベッドから起き上がり、鞄の中を探る。そして、昨日、夜中に探し回っていたものを取り出した。

それをじっと見つめた後、二人を起こさないようこたつと、リンベルに近づいた。

何の音だつただろう。

それは最早、確認する術もなく、アーネスト自身、それを確認しようとは思わなかつたが、小さな物音で目を覚ました。

目を擦り、リーンベルの方を見る。

真つ暗ではつきりとは見えなかつたが、誰かがリーンベルの腕を持ち、何かしているではないか。

アーネストはすぐに銃を取り、その誰かに向ける。

「誰だ。何をしている」

静かな声で言った。できるだけ、相手に動搖を悟られないようこゝ、言つたつもりだ。実際には心臓が弾けそうになつていた。

黒い影が立ち上がる。

「動くな！」

厳しい口調で言つた。相手から溜息が漏れる。

「僕を忘れましたか？」

影の人物は口を開く。聞き覚えのある声だった。

「ミズキ？」

「そうです。警戒するのはいいですが、ちゃんと状況確認もしてほしいのです」

ミズキはふと息を吐きながら言つた。

「何をしていたんだ？」

「・・・リーンベルの体調を確認していました」

「こんなに真っ暗な中で？」

「起こさない方がいいと思つたからです」

そう言つとミズキは、手に持つていた何かを鞄にしまつ。

「それは？」

「ウエムラに借りている医療器具です」

すぐにベッドの中に入り、アーネストに背を向けた。

しばらくその姿を見ていたアーネストだが、寝息が聞こえてきたので、彼ももう一度寝ることにした。

目を覚ました。

辺りの匂いが変わったからだ。

ミズキはベッドから起き上がる。

既に原因はわかつっていた。

彼女はすぐそこに立っていた。
虚ろな目でミズキを見つめている。

ゆっくりと左右に揺れていた。

「足りなかつたのか」と舌打ち。

鞄を取るために、素早く床を蹴った。だが、それも遅い。
リーンベルに背を向けた瞬間。ミズキは背に衝撃を受け、壁に弾き飛ばされた。銃を構え、リーンベルに向ける。だがトリガは引けない。そんなことをしては、元も子もなくなってしまう。

威嚇程度に、リーンベルの足元に弾丸を放つ。一瞬灯りともし、
彼女の目が妖しく光つた。

銃声を聞きアーネストが飛びきる。その時には、ミズキは既に壁に押さえつけられた。首を片手で、銃は膝で押さえられており、身動きが取れていらない。

「リーンベル！」

状況を理解したアーネストが、銃口をリーンベルに向ける。だが、それと同時に、「撃つな！」とミズキが苦しそうな表情で叫んだ。その声で、アーネストは危うく引きかけたトリガから指を離す。ミズキはアーネストを睨み、彼のそれ以上の行動を許さなかつた。仕方なく、銃を構えたまま、固唾を飲んで見守ることにした。

リーンベルの顔がゆっくりとミズキに近づく。ミズキには、首で彼女の荒い呼吸が感じられた。彼女の歯が首筋に当たり、一瞬背筋を何かが伝う。そして、徐々に圧力が加わり、首を噛まれているのがわかつた。幸い、まだ血は出でていないらしい。

「僕の血を飲みますか、リーンベル？」

ミズキは僅かに動く首を、リーンベルの耳に近づけて、囁いた。

「君が必要としているのは、女、処女の血ではなかったのですか？」

ピクリと動いたリーンベル。動きが止まっていた。

「そう、ミズキさん。あなた、違うのね」

リーンベルが顔をミズキから放し、首を傾げながら、残念そうにつっこりと微笑んだ。

ミズキはその瞬間に、ポケットから素早く何かを取り出し、彼女の首筋に突き立てた。

「何を！？」

アーネストが叫ぶ。

リーンベルはそのまま横に倒れる。ミズキが、床に倒れ込む直前の彼女を抱き留め、ベッドに寝かせてやつた。

ミズキが手に持っていたものを、アーネストに見せた。

「注射器？」

「ええ、そうです」

「それで何を？」

「血です。女性の・・・」

アーネストの表情が驚愕に染まる。

「なぜ、そんなことを・・・？」

「今のリーンベルとの会話で、わかりませんでしたか？」

軽く息を整える。

「彼女が、一週間ごとに女性の血を抜いて殺していた犯人です」

ミズキは静かに言った。

第十五話 伸ばした手の手は届かない。（後書き）

「キャラリースト。」の作品をつけておきます。・・・

ア「まともに話せやうなの、俺ぐらいだもんな」

「うん・・・」

ア「感想、評価、誤字脱字の指摘、その他作品への意見など寄せ
いただけたと嬉しいです」

第十六話 それはまた、別のお話

『いつの間にか引き込まれてしまつた深淵。

足搔いても、そこから逃れることはできない。

彼は気づくのだろうか。

自分の愚かさ、

自分の弱さに。

』

既に息は上がっている。ミズキは外見の通り、力もなければ体力もない。加えて、靴には鉄板を仕込んでいるため、普通の物より重い。体力は限界に近かつた。

追手はこちらに来ているだろうか。いや、来てもらわなければ困る。アーネストでは、リーンベルを護りながら、戦うことなどできないだろう。まず、彼の場合、人に向かつてトリガーを引けるかどうかすら、怪しいものがある。

ミズキは後ろを振り返った。街灯を壊しているせいで、暗くて何も見えない。だが、一瞬何か嫌な気配を感じた。

どうやら、こちらに来てくれたようだ。

意識していないのに、口角が上がる。
さて、この後はどうしたものか。

街の中を駆けながら、思考を巡らした。そのまま、逃げ回つても埒^{らち}が明かない。相手がリーンベルを狙つてゐるのなら、ずっと危険が付きまとつことになる。それならば、いつその事、ここで迎え撃つた方がいいかもしれないと思つた。

ミズキは街灯を壊すのを止めて、自ら姿を晒した。
振り返り、暗闇に向かつて銃を構える。吸い込まれそうな闇だつた。

足音が聞こえていた。

「おや。君だけしかいないとは。してやられた、といつゝとか・・・」

男の声。

ミズキは地面に向けて一発、銃を撃つた。

「銃を下ろせ。君とやり合つつもりはない」

「姿を見せてください」

「わかった。今から、そちらに出てよ」

驚くほど落ち着いた声だつた。先ほどまでの嫌な感じもなくなつた。どうやら嘘ではないらしい。ミズキを殺すのであれば、黙つて闇に潜んだまま、トリガーを引けばいいのだから。

足音が徐々に近づいてくる。ミズキは暗闇を睨んだまま、じつとしていた。

「そう怖い顔をしない方がいい。可愛い顔が台無しだ」

姿を現したのは、背が高く非常に上品な身なりをした男だつた。片手には拳銃を持つてゐるが、その手は下ろされたままだつた。銃口をこちらに向ける気配もなかつたので、ミズキも銃を下ろすことにした。

「僕は男です」

ミズキは男を睨んだまま言つた。

「これは失敬。だが、女性だ、とも言つていないので」

ミズキの眉がピクリと上がった。反射的に銃を構えようとしたが、何とかそれをこらえる。それが分かつたらしく、男は楽しそうに笑つた。耳に着く、嫌な笑い声だつた。上品なのは身なりだけか、とミズキは溜息をつく。

「なぜ、姿を現したのですか？」

「それは既に分かつてゐるのでは？」

「目的はリーンベル・ローズヴェルトですか？」

また、嫌な笑い声。どうやら、イエスと言つてゐるようだ。

「そう。確かに、彼女が俺の目的だ。だが、君とは内容が違うみたいだけだな」

ミズキは眉をひそめた。

「リーンベルを殺そうとする理由は？」

「殺す？」

男は高笑いした。どこまでも、耳に着く、嫌な笑いだ。いい加減、ミズキもうんざりしていた。

「俺は彼女を殺そうとは思っていない」

「・・・どういう意味ですか？」

「彼女の邪魔者を、排除するように命じられているのだよ」

「それはどういう

「そのままの意味だ。彼女の封印書、だつたかな？ その手助けをしろと、言われていたんだ」

「どこか、引っかかる言い方だつた。すぐに気が付いたミズキは「過去形ですか？」と返した。

「もう解雇されてしまった」

大げさに肩をすくめ、溜息をつく男。

「解雇された人間が、なぜリーンベルを？」

「個人的に、彼女に興味があつたのだよ。特に、一週間に一度、女の血を飲むところとか」

「やはり、あの事件はリーンベルが起こした物でしたか。それに、

飲んでいたとは・・・」

しかし、ミズキにはこの男がリーンベルを追つている理由が、それだけではないような気がしていた。男の目を見ればなんとなく、それが伝わってくる。彼はリーンベルに魅せられているのではないだろうか。

ミズキも経験したことがある、リーンベルの不思議な魅力。写真だけで吸い寄せられそうになつたことを覚えている。

「君はなぜ、リーンベルを？ 目的は一体？」

「僕は依頼で、リーンベルを探すように頼まれていただけです」

「なるほど、バウンティ・ハンターと言つやつか」

「便利屋です」

すかさず訂正する。

「依頼主は？」

「僕が言つとりますか？」

「俺は、国王とジョセフという老人に頼まれていた」

一瞬、ミズキの目が揺れる。男はそれを見逃さなかつた。

「どうやら、聞き覚えがあるようだな。それとも、依頼主が同じだつたか？」

動搖を隠したつもりだったが、見抜かれてしまう。ミズキは聞こえないように舌打ちした。

「そうです。僕もジョセフから依頼を受けました」

ポケットの煙草を取り出し、火を点けた後に、ミズキは言つた。

「リーンベルはなぜ血を飲む必要があるのですか？」

煙を吐き出す。

「なんだ、聞かされていないのか？」

「何を？」

「血を飲む理由。それは体の機能を維持するためだと聞いている」

「体の機能を維持？ 彼女は一体・・・？」

「本当に何も聞かされていないようだな」

男は溜息にも似た笑い声を出した。

「彼女は三十年ほど前に、ある実験で生み出された人造人間だ。ホムンクルス歳

も取らない。何の目的があつて作られたのかは、わからないがな
人造人間。^{ホムンクルス} その言葉にミズキは自分の耳を疑つた。

そんな物が存在するのか。一体どうやつて。いや、ウエムラほど
の頭脳を持った科学者が何人か集まれば、可能なのかもしない・
・。

思考を巡らしていると、男が小さな声で笑つた。

「その顔は、信じられない、という顔かな？」

その通りだつた。実際にまだ、信じられない。

「俺も最初は信じられなかつた。だが、彼女の容姿は、俺が初めて
見た時からずつと変わつていない。それに写真も見たことがある。
十年以上も前の物だ」

「信じるしか、ないようですね・・・」

男の言葉は、嘘のようには感じられなかつた。

「リーンベルに興味があると言いましたね。ではなぜ、あなたはリ
ーンベルが血を飲む邪魔をしたんですか？」

「彼女がどうなるか、見てみたかつた。結局、君に阻まれてしまつ
たけどね」

「純粹な興味？」

「ああ。その通り」

「ならば、どうです。『』一緒に？」

「どういうことだ？」

「僕たちと一緒に来れば、こそそとをする必要はない」

思考を巡らせた結果だつた。リーンベルが人造人間だらうと、ミ
ズキには関係ない。理由がどうあれ、ジョセフの所へ連れて行けば
よいのだ。

この男を放置しても、また何かされかねない。それならば、リー
ンベルの安全を守るために、この男を利用する。そして、もし何か
危険なことをしようとしたすれば、その時点で排除してしまえばいい。

それに、この男が国王と通じていたのであれば、それを利用して、
第一王子への復讐を果たすこともできるかもしれない。

「なるほど、なかなかいい提案だ。俺はサイラス・マグリ。君は？」
正直、これほど素直に話に乗ってくるとは思っていなかつたミズキは、少し動搖した。

一人でホテルに戻つてゐる時だつた。不意にサイラスが口を開く。

「ところで、その赤髪。君は魔女かい？」

その言葉に、ミズキの足が止まつた。『魔女』という言葉に、憎悪にも似た感情が、吹き出しそうになる。

「男でも、『魔女』と呼ぶのは不思議だがね……。この国で魔女がいない理由は知つてゐるよ。数年前に、魔女狩りが行われただろう？　村を一つ、壊滅させたはずだ。俺も、その部隊に所属していた。部隊を率いていたのは、この国の第一王子だったが、ジョセフはその時の指揮官だつたかな？」

指の間に挟んでいた煙草が、ぽとりと地面に落ちた。

「あれはよかつた。女子供の悲鳴が

振り向きざまに、サイラスの足に向けて一発、銃を撃つた。至近距離から撃つた弾丸は外れるはずもなく、彼の左の太ももに命中する。

「お前も、あの場にいたのか……？」

太ももを撃たれた痛みで、地面を転がりながら叫び声を上げるサイラス。ミズキは冷たい目で彼を見下ろしながら聞いた。

「畜生！　魔女め！」

サイラスは銃を取り出そうとする。その手をミズキが撃った。サイラスの手ははじけ飛び、指がなくなる。また叫び声を上げた。

「魔女め！ 魔女め！ 殺してやる！ 魔女狩りの時のように！」

呪詛の言葉が、ミズキに向かって吐かれる。それが急に恐ろしくなり、ミズキはまた、トリガーを引いていた。

トリガーを引き続けた。何度も、何度も何度も。

サイラスがもう息をしていないことなど、お構いなしだった。とにかく、この男が生きていた、存在していた、という事実すべてを消し去りたかった。そのためにまず、肉体を消してしまおうと考えている様だった。

一発。もう一発と、弾丸がサイラスに当たるたびに、ビクンビクンと体を痙攣させている。ミズキにはそれが恐ろしくてたまらなかつた。起き上がってまた、あの呪詛に満ちた言葉を、自分に向けてはなつてくるのではないかと思えて、仕方がなかつた。

弾倉マガジンの弾が尽きてても、すぐにリロードを行い、絶やす間もなく次弾を撃ち続ける。腕が徐々に痺れてきており、照準が定まっていかつた。数発に一発がサイラスに当たらず、地面に当たつていた。

それでも、ミズキは撃ち続けることを止めなかつた。

最後の弾を撃ち終わつた時、そこはあまりにも酷い惨状が広がつていた。既に誰だかわからないほど、穴が開いたサイラス。男か女かすらわからないほど、死体は損傷している。大量の返り血がミズキに付着していた。

いつの間にか、息遣いが荒くなっている。

「ちくしょう・・・！」

一人、地面に膝をつき、闇に向かつて呟いた。

ふらりと立ち上がりたミズキは、顔についた返り血を拭った。既に感情のコントロールは終わっている。

まだ、やらねばならないことがある。

リーンベルに血が必要だと呟つことはわかった。その血を集めなければならぬ。

それに、ジョセフ。あの男が国につながっているとは思いもしなかつた。それに、魔女狩りの当事者だったとは。

サイラスを殺してしまった今、ジョセフを利用して、第一王子に近づくことはできないかと考える。もちろん、その後にジョセフも殺してしまわなければならない。

気が付けば涙が流れている。それでも、ミズキにはただの水分が、目から流れているだけのように思えた。

ミズキは闇の中、おぼつかない足取りで歩き始めた。

明け方になると、そこら中の家に明かりがともつた。

どうということだ、と疲れで鈍った頭を回転させた。恐らく、今までの事件が深夜に起つていたから、明け方ならば危険はない」と、判断しているのだろう。

安易な考えだ、とミズキは口を緩める。

ここにも一人、犯罪者がいるといつに・・・。

まだ、それほど明るくはない。顔を見分けるには、かなり近づかなければわからないだろう。

物陰に隠れ、息を潜める。

寒さで指がかじかんできた。今までは、そんなこと、少しも気にならなかつたのに。きっと、緊張から解放されたからだろう。

手に息を吐き、擦り合わせる。ポケットから手袋を取り出し、それを両手にはめた。

玄関のドアが開き、女性が顔を覗かせる。辺りを何度か確認して、外に誰もいないのがわかると、女性は家の外に出てきた。暗くてよくわからなかつたのだが、女性、というのは少し違うかもしれない。まだ、少女と言つた方がいいだろう。

後ろからそつと近づいたミズキは、薬物を含ませたハンカチを女性の口に当てた。

一瞬うめき声を上げた女性は、すぐに体の力が抜けたように、その場に倒れた。女性を床に寝かせたミズキは、ポケットから注射器を取り出す。

まさか、ウエムラから借りていた物が、こんなところで役に立つとは、思つてもみなかつた。

「少しだけ、もらづよ」

彼は少しだけ微笑みながら言つた。

第十六話 それはまた、別のお話（後書き）

すみません。

今回、上手くまとまつていないです。

おかしなところがあれば、意見を寄せていただければ、
隨時修正していきたいと思います。

あと、物語には影響しない程度の、加筆修正もするかもしれません。
修正した後は活動報告を書くので、よかつたら覗いてみてください。

第十七話 言わなくてもわかる「」、聞かなければわからないこと

『「瑞姫」』

「なに、道流？」

二人は微笑みあつた。

続きを喋ろうとした道流を、瑞姫の手が止めた。

「しーっ…」

瑞姫が口の前に人差し指を立てる。

「口に出さなくとも、わかってる」

道流が何を言おうとしたのか、

瑞姫にはわかっていた。

「その後、他にも数人、血をいただきました」

あれから大人しく寝ているリーンベルの頭を、ミズキはそつと撫でた。

「彼女は僕たちが思つてゐるような子ではなかつた」と息を吐きながら言つ。

「どうです。納得しましたか？」

肩を震わせながら聞いているアーネストに、ミズキは声をかけた。部屋の電気は点いておらず、彼は俯いているので、表情は読み取れない。アーネストは、リーンベルをちらりと見て、立ち上がつた。

「何が、納得しましたか、だ。澄ました顔して。自分が何をやつたか、わかっているのか」

厳しい表情でミズキを見下ろす。だが、ミズキは無表情のまま、アーネストを見つめ返していた。

「君は何に怒つてるんですか？」

「罪のない人を、傷つけたことだ」

溜息を吐き、アーネストを見る。

「僕は目的を果たすために手段を選ぶつもりはありません」「お前……！」

「言つたはずです。優先順位を考える、と」

アーネストは、ミズキの襟を掴み、壁に押し付けた。初めてであつた日のように、ミズキは一切抵抗しなかつた。

「突然どうしました？」

いきなりつかみかかったにも関わらず、ミズキは至つて冷静だった。まるで、この状況を予想しているかのようだつた。

「お前を自治団体に引き渡す」

襟をつかんだ手に入れるアーネストだったが、首に当てられた冷たい感触に、動きが止まつた。ミズキが、僅かに動く手で、銃を突きつけているのだった。

「いいえ。それはできない相談です」

その声は氷の棘となり、アーネストに刺さつた。

「僕の邪魔をするなら、ここで死んでもらいます」

ミズキが本気だということを伝えるには、アーネストの目を見るだけ十分だった。

「言つておきますよ。僕は、君を仲間だとか、友人だとか思つたことは、一度もありません」

「じゃあ、なぜ俺を連れてきた」

苦し紛れに、咳く。

「役に立つと思ったからです。でも、それもこれで終わりです。僕はここで歩みを止めるわけにはいかない。僕の目的、話したことあるでしょう?」

帰つてきた答えは、冷たい答えだった。答え自体も冷たかつたが、ミズキの言葉、いや、ミズキ自身が冷たかったのかもしれない。アーネストは、ミズキに対して、これまでに感じたことのない恐怖を感じた。

「どうしてそんなに、復讐にこだわる?」

「答えは簡単だ。僕は君じゃない。ただ、それだけだ」

「そんなの、答えになつていない! ミズキ、そんなに復讐が大切か?」

声を荒げ、アーネストは銃を突きつけられていることも構わず、さらに力を込めミズキを押さえつける。

「君に、僕の何がわかる!」

ミズキは、アーネストの首に突きつけた銃をさらに、押しつけた。「すべてを奪われた、僕の、なにがわかると言つんだ、アーネスト!」

静かに、しかしこれまでにない怒りのこもつた強い口調に、アーネストは一瞬身を引いてしまった。その隙を見逃さず、ミズキは、アーネストの腹を銃で殴りつける。不意を突かれたアーネストは、膝を折り咳き込んだ。

銃をしまったミズキは、アーネストを見下ろした。

「それに、僕が女性を襲つて、血を集めておかなければ、リーンベ

ルは一週間に一人、人を殺すんですよ？ 僕がした行為は、彼女に人を殺させずに済んだ。十分でしょう

「どうして、こんな子どもが！」

床を叩き、アーネストは小さくつぶやく。

「さつきの話をちゃんと聞いていましたか？ 彼女、子どもなんかじゃありませんよ」

「なに？」

「気になるなら、聞いてみればいい」

ミズキは服の乱れを整えながら続ける。

「ミズキさん？」

一人が声のした方を見ると、リーンベルが眠たそうに目を擦つていた。

「大丈夫です。ゆっくり寝ていなさい」

ミズキがリーンベルに優しく声をかける。すると、彼女はすぐに安らかな寝息を立てて、また眠りについた。アーネストにはどこからどう見ても、彼女が少女にしか見えない。

「アーネスト。君も、早く寝るといい。

明日になつたら、

君は家に帰りなさい。やはり、君には向いていない」

そう言つと、ミズキは自分のベッドに潜り込んでしまつた。ミズキから言われた、言葉に混乱したまま、アーネストは眠りについた。

「おはよう、アーネスト。家に帰る準備はできましたか？」
先に起きて、ベッドに腰掛けていたアーネストに、ミズキは声をかけた。びくりと動いたアーネストを鼻で笑う。

「俺は帰らない」

「へえ…」とミズキは驚いたふりをした。馬鹿にしているようにも見える。だが、アーネストを拒絶しようとはしなかった。まるで、アーネストが、着いて来ようとするのことを知っていたかのようだ。

「止めないのか？」とアーネスト。

「止めて、どうせ付いて来るんでしょう？」

ミズキは窓の外を眺めながら言つた。煙草でも吸いたそうな表情だ。

「おはよう、リーンベル」

「おはよう、ミズキさん」

二人はお互に笑顔で挨拶を交わした。二人の笑顔はどこか似たところがある。それが一体なんなのか、アーネストにはわからなかつた。

「リーンベル、少し事情が変わりました。僕たちには猶予があまり残されていません。わかりますね？」

「ええ、昨日の事でしょう」

黙つたままミズキは頷いた。

「あと、十日分しか残つていません」

「十分だわ。帰りは一瞬ですもの」

その言葉に、ミズキとアーネストはお互いに顔を見合させる。リンベルの言葉の意味が全くわからなかつたのだ。それに気が付いたリーンベルは、くすりと悪戯っぽく笑う。

「また、後でお話します」

「あ、ええ、わかりました」

ミズキは戸惑いながらも返事をした。

「リーンベル…」

「どうしましたか、アーネストさん。後でお話しする、と言いましたよ？」

「そのことではないんだ」と一度、口を噤んだ。

「歳は、いくつなんだ？」

「まあ……」

口に手を当て、リーンベルは大袈裟に驚いて見せる。それを見たアーネストは、一瞬どきりとした。

「女性に年齢を聞くなんて、マナー違反じゃなくつて？」

「いや、俺じゃない。ミズキが聞けと」

「そなんですか？」

口を膨らませながら、ミズキを睨んだ。

「僕は、気になるなら、と言つただけです。僕が、聞け、と言つたわけではありません。アーネストの意思ですよ」

「ああ、やつぱり」

ぐるりとアーネストの方を向いた。

「別にかまいませんけどね」

ほつと息をついたアーネスト。

「私、52歳です」

「え、今なんて……？」

アーネストは、驚いてリーンベルに詰め寄る。その様子を笑いながらミズキは眺めていた。

「私、52歳です」

まるで録音したテープの様に、リーンベルは同じ調子で繰り返した。

「俺より年上。三十以上も……？」

「ええ」

彼女は頬に手を当て、首を傾げた。

第十八話 魔女の泣声

「そういえば、どうして、そんな子供のような仕草ばかり」

「それは、ほら、年相応の言葉づかいや物の言い方をしていると、反感を買ってしまうといけませんから。生意気と、言われるかもしないでしょう？」それに、外見通りに振る舞えば、相手も優しくしてくれます」

そう言いながら、リーンベルはアーネストに近づいた。そして、耳元でそつと「貴方みたいに」と囁いた。耳を押さえながら、アーネストは後ずさりする。

「ミズキ。知っていたのか？」

「何となく、そんな気はしていましたよ。まず、彼女が白黒写真に写っていた時点で、気が付かない君もどうかと思う。一体何年前だと思っているんですか？」

「何で、言つてくれなかつたんだ」

アーネストは顔を赤らめる。

「気づいている物だと思っていました。それに、君が気づいていくとも、依頼を達成させるうえで全く、何の障害にもなりません」ミズキは先頭を歩いている。煙草を吸いながら、後ろにいる二人を見ずに言つた。

「僕はリーンベルを連れて行くだけでいいのですから。別に貴女がどんな人物であろうと、人ですらなかろうと、僕には関係ない」

その言葉に、リーンベルは俯いて、足を止めた。同時にアーネストも足を止めたが、ミズキは気が付かずに、歩き続ける。

「ミズキ。その言い方はないだろ？」

ミズキは振り返り、俯いたままのリーンベルを見た。彼女は少し唇を噛んで、頬を膨らませていた。恐らく、この仕草も、長年同じ姿で生きてきた功、という物だろう。少女の仕草であつて、女性の

仕草には見えない。正直、彼女が52歳だとは思いたくなかった。

「いいえ。いいの。私、ミズキさんのドライな所、好きよ」

膨らませた顔を、すつと笑顔に変える。速い。とても速い変化。

切り替えと言つた方がいいだろうか。

「僕、そんなに渴いていますか？」

ジヨークのつもりだった。

「ええ、渴ききつているわ。少量の水なんか、無意味でしょうね」笑顔のまま言うリーンベルに、ミズキは驚き、目を見開いた。そして、小さく舌打ちすると、また前を向いて歩き始める。その後ろをリーンベルが小走りで追いかけていく。彼女が走るたびに、綺麗に伸ばした金髪が揺れていた。

「貴方を潤せるとしたら、誰か、愛すべき人が必要かしら?」

「いえ、必要ありません」

「え、どうして?」

「もう、僕の渴きは、誰にも潤せるものではないから」

手の上で、淡い青色に光る石を転がしながら、空を見上げるアーネスト。彼の持つている石が、リーンベルの探している鉱石だった。こんなちっぽけな石が、自分たちを、この街に五日も引き留めていたと考へると、可笑しくて仕方がない。いや、本来ならば、笑つていられるような状況ではなかつた。

ミズキが準備していた血は、残り五日分しか残つていない。ここからミズキの街へ戻るのに、最短ルートを進んだところで、五日以上かかるのだ。依頼の期限までまだ時間があると言つたところで、リーンベルの身体に危険が及ぶ。そうならないためには、新しい血を採取する必要があるのであるのだ。

アーネストはそれに反対だつた。ミズキは目的のために手段を選ばないと、そう言つたが、彼にそんなことをさせたくなかつた。

「そもそも、なぜ、血を飲む必要が？」

「別に、飲まなくたつていいのよ。身体の中に取り込めば、それでいい。ミズキさんがやつたみたいに……。理由は、残念だけれど、私もわからない。ただ、血がないと、駄目みたいね。禁断症状とうやつかしら？」

彼女は、ミズキの質問に答え、少し離れた場所に座っているアーネストの方を見た。

「私だって、好きでこんなことをしている訳では、ないのよ」田がゆっくりと伏せられる。「でも、生きるためにには、仕方がないことだつてあるわ」

一瞬、田が合つたが、アーネストはすぐに、彼女から田を離した。心を読まれたような気分で、居心地が悪かった。

「少しの間、我慢するといつことはできませんか？」

「残念だけれど、それはできません。私だって、今までずっと耐えてきた」

ミズキは顎に手を当てて、低く唸つた。しばらくして、何かに気づいたように、空を見る。だが、あまりいい表情とは、言えなかつた。

「あの、リーンベル……」

「なあに？」

少し、躊躇いながらも、言葉を続ける。

「鉱山へ行く前に、帰りは一瞬、と言つていきましたよね？」

「ええ、言いました」

「それは一体、どういう？」

「ミズキさん、貴方、魔女でしょ？」

その言葉に、ほんの少しだけ、ミズキの眉が上がる。振り返ったミズキは、煙草を地面に捨てて、靴底で火を揉み消した。リーンベルを正面に捉え、その目を見返す。

「僕は、魔女では……いいえ。そうです。僕は、魔女です」一度、否定しかけたが、ミズキはそのまま続けた。「でも、それは伝承で

あつて、差別用語です。今、その言葉には、何の意味もありません

「差別用語。ええ、その通りね。赤髪は魔女の証。獣との混血。災

いをもたらす者として、昔はずいぶん酷い差別があつたわ」

「理解できない現象を、魔女のせいだと決めつけ、その者達を生贊にする。そうすることで、行き場のない怒りや悲しみに、行き場を作る。身分の低い者たちに、自分より下がいると思わせた。魔女は、そんな馬鹿げた政策の一環に過ぎない」

二人は、お互に向かい合い、静かな口調で言った。

「でもね、ミズキさん。それだけではないのよ」

「言っている意味が、わかりません」

ミズキがそう言つと、リーンベルはミズキの目の前に、人差し指を立てた。

「煙草をくわえて

「え？」

「言つた通り。煙草をくわえてください」

言われるままに、煙草をくわえる。

「そのまま、私の人差し指に近づけて」

そして、数秒。

リーンベルの人差し指から、小さな炎が上がり、ミズキの煙草に火を点けた。

驚き、一度身を引きかけたミズキだが、いつもの様に煙を吐き、リーンベルを見つめる。

「私にも、魔女の血が流れているの」

赤の魔女と金の魔女

呆然としていたミズキだが、軽く目を瞬かせた後、リーンベルに詰め寄つた。

「待つて、リーンベル。今のは、一体なんですか？ 指から火が出ていた」

「魔法よ。言つたでしょ？ 私、魔女の血が流れているの。正確には、取り込んだ、と言つた方が正しいわね」

「魔法？ そんなもの、僕は見たこともない。第一、魔女の血だなんて……」早口になつていたと気が付いたミズキは、一度言葉を切り、ゆっくりと次の言葉を続ける「髪が赤くなるだけの、ただの遺伝だ。魔法だなんて、空想でしょ？」

「いいえ、ミズキさん。魔女は、単なる差別用語なんかではないの。魔女の血を引く者は誰だつて使えるわ」

ミズキは顎に手を当て首をひねる。金髪の魔女は、その様子を微笑みながら見ていた。ミズキが何かを言つまで、自分から口を開くつもりはないらしい。そして、数分後、何かに気づいたように、ミズキが顔を上げた。

「ああ、そうか。もう少しで騙されるところだつた。」

「騙す？ 誰が？」

「誤魔化さないでください。魔女の血は、遺伝で髪が赤くなるんです。こんな風にね」自分の髪を指さし、搔き上げる。「君は金髪だ。魔女の血筋ではない

「薄いだけよ。ただ、表面的に見えてないだけ。あなた、自分で言つたじゃない、遺伝だつて」

「それは……」顔を背けるミズキ。

「こっちを向いて」

ミズキに近寄つたリーンベルは、ミズキの顔を両手で優しく包むと、自分の方へとむけた。

「ごめんなさい、ミズキさん。確かに、私は魔女の血筋ではないわ」「でもね」と続ける。「私が作られるとき、魔女の血が大量に必要だつた。特別な血、呪われた血だつたから。だから私は魔法を使える。命を削つてだけれど」

赤髪の魔女は、何も言わずにリーンベルの顔だけを見つめていた。「三年前、魔法を使いすぎた私は、身体を維持するための魔女の血が足りなくなつていた。そして、魔女の血がまた私の中に入つてきた」

「ミズキ」

不意にアーネストが口を開く。気が付けば、リーンベルの視線は、ミズキの足元にあつた。話しているうちに、視線が下がつてしまつたらしい。

「あ……」

リーンベルの目の前には、銃口が、涙で頬を濡らすミズキがいた。

「君が、原因か」

震える銃口を両手で必死に抑えているミズキは、同じように震える声で言った。

リーンベルは静かに頷いた。

しばらくそのままの状態でいた一人だが、ミズキががくりと項垂れ、銃口を下ろした。

銃をしまい、目元を拭つたミズキは、もう泣いていなかつた。ふう、つと息を吐くミズキ。

「でも、魔法なんて、誰も、僕にはそんなことを話してくれなかつた」

「仕方がないわ。だつて貴方、違うでしょ？」「違う？ 僕の何が違うと言つんだ？」

「わからないの？」

少し間を開けて、首を横に振つた。

「気づいていないならいいわ。ただ、仕方がなかつたのよ。貴方は知ることを許されなかつた」

「どうして？」

「どうして？ それを、私の魔法を見て、あんな反応をしたあなたが、どうして言えるの？」

「そんな。皆、僕にだけ黙つているなんて……」

「あなたが悪い訳ではありません。何度も言つけれど、仕方がなかつたのよ」

まだ少し残つていた煙草を、ミズキは投げるようにして捨てた。

「仕方ないだなんて。僕はそんな言葉、聞きたくもない」

その言葉を聞き、リーンベルは黙り込む。

「ねえ。アーネスト、僕は」 アーネストと視線が合つと、何を言おうとしたのか、口を噤つぐんでしまつた。「いや、なんでもない」

「話はわかりました。僕が、何も知らなかつたということも「よかつたわ」

なにがよかつたのか、ミズキにはわからない。もしかすると、意味のない「よかつた」だったのかもしれないと思つた。

「それで、僕はどうすればいいのですか？」

「力の使い方を覚えてもらいます。あなたならすぐにできるわ

「こ」の前から不思議に思つっていたんだが、なぜ男も魔女と呼ばれるんだ？」

アーネストが口を開いた。

「魔法使いだなんて。あまりにも粗末なネーミングセンスだと思わない？ 魔女の方が素敵。だから、魔女で統一されているの」

金髪の魔女は、くすりと笑つた。

「そうなのか？」

アーネストは赤髪の魔女の方を向く。新しい煙草に、火を点けている最中だった。

「知りません。でも、魔法使いより、魔女の方が素敵なのはわかります」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6767v/>

ANOTHER SKY

2011年11月26日17時50分発行